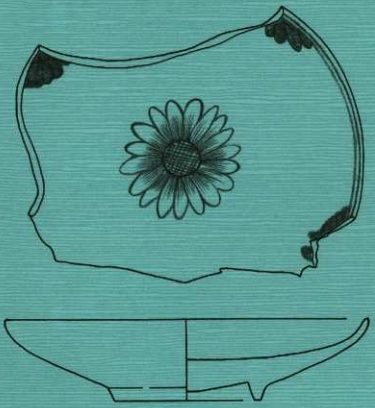
高知市文化財調査報告書第32集

金子橋遺跡

―第六小学校屋内体育館及びプール改築工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書―



2008. 3

高知市教育委員会

金子橋遺跡

―― 第六小学校屋内体育館及びプール改築工事に伴う
埋蔵文化財発掘調査報告書 ――

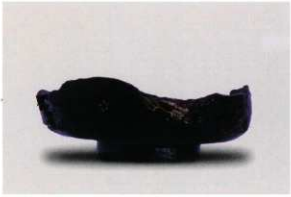
2008. 3

高知市教育委員会

SK2　遺物出土状況

SK3　遺物出土状況

漆器椀蓋（277）



漆器椀（278）

漆器椀（279）

漆器曲物（101）

下駄（291）

初期伊万里皿（638）

初期伊万里皿（345）

瑠璃釉蓋物（160）

色絵うがい茶碗（168）

色絵神酒徳利（701）

京焼蓋物（521）

尾戸焼皿（711）

京都系碗（177）

白磁水滴（170）

色絵水滴（171・172）

瓦質土器ミニチュア（543）

土人形（533）

土人形（435）

土人形（457）

鳩笛（546）

泥面子（653）

序

山内一豊は、土佐に入国した慶長6（1601）年に大高坂山へ築城を開始し、並行して城下町の建設を行いました。このうち、鏡川と江ノ口川とに挟まれ東西の外堀で区画された地域を郭中と呼び、藩主に仕える上級武士を住まわせました。金子横遺跡は、その中では南西端に位置し、かつて外堀に架かっていた橋がその名の起こりとなっています。

この度、市立第六小学校の新体育館建設に先立ち校庭北西部において発掘調査が行われ、武家屋敷の跡が見つかりました。江戸時代の古絵図をみると、当地には屋敷の区画と主の名とが記され、上級武士の屋敷地であったことが遺跡からも確かめられました。

当地からは、金蒔絵を施した什器類のほか、化粧具、文房具、玩具といった生活品が次々に出土し、それらは武家の豊かな暮らしぶりを生き生きと語るものでした。

今回の調査は、高知城下町の武家屋敷群としては最初の本格的な発掘調査であり、江戸時代の社会や地勢を理解するうえで貴重な成果を得ることができました。

この報告書が高知市の歴史を理解するために新たな役割を果たし、地域文化の解明への一助ともなれば幸いです。

最後になりましたが、調査に御協力いただきました多くの皆様に厚く御礼を申し上げます。

平成20年3月

高知市教育委員会

例　言

1．本書は、高知市教育委員会が平成18年度に実施した第六小学校屋内体育館及びプール改築工事に伴う埋蔵文化財発掘調査の報告書である。
2．調査対象地は、高知市升形9番地4号に所在する。
3．調査期間と調査面積は次の通りである。資料整理、報告書作成は平成18年度から19年度にかけて行なった。
　試掘調査　平成18年6月5日～6月8日、調査面積132.0㎡
　本調査　　平成18年6月12日～6月30日、調査面積702.0㎡
4．調査体制は以下の通りである。
　調査主体　高知市教育委員会
　調査事務　同　総務課主査　上田満春
　調査担当　同　生涯学習課指導主事　梶原瑠司、浜田恵子
5．本書の執筆と編集は浜田が行い、遺物写真は梶原が撮影した。
6．調査にあたっては、高知市立第六小学校をはじめとする関係諸機関の方々の協力を得た。
7．発掘調査にあたっては出原恵三、松田直則をはじめとする諸氏から助力を得た。また、文献・絵図調査に関して内川清輔・吉松清峯、陶磁器の資料調査について大橋康二、赤松和佳、加藤真司、日下正剛、佐藤公保、渡辺晴香、近世瓦について土居利光、はじめ諸氏のご教示を賜った。(敬称略)
8．発掘作業、整理作業においては下記の方々の協力を得た。
　[測量補助] 大野佳代子
　[発掘作業] 秋山純一　上田善右　大﨑数恵　岡崎速男　尾崎定富　梶原教史
　　梶原康代　亀井清恵　坂本洋子　杉本直助　住田陽一　野村満子　町田憲嗣
　　三谷哲彦　山口寿子　山口優幸
　[整理作業] 大野佳代子　岡本遼　松木富子　渡邊可奈子
9．掲載している平面図の方位は国土座標を基準としている。巻末の報告書抄録における経緯度については世界測地系の数値を使用している。
10．遺構の略号は、土坑：SK、溝：SD、柱穴及び小型の穴：P、とした。
11．出土遺物は通し番号とし、挿図、写真図版とも同一番号を使用した。遺物は高知市教育委員会が保管している。注記の略号は「06－KB」である。

本文目次

第Ⅰ章　調査に至る経緯と経過……1

第Ⅱ章　遺跡の地理的・歴史的環境
　1．地理的環境……2
　2．歴史的環境……2

第Ⅲ章　調査の方法……8

第Ⅳ章　調査の成果
　第1節　試掘調査……10
　第2節　基本層準……17
　第3節　遺構と遺物……21
　(1) 土坑……21
　(2) 溝……72
　(3) 包含層出土の遺物……86
　(4) その他の遺物……89

第Ⅴ章　考察
　第1節　金子橋遺跡、居住者の性格と動向……128
　第2節　金子橋遺跡、検出遺構の特質と空間構成……138
　第3節　金子橋遺跡出土遺物の様相……143

挿図目次

Fig. 1　金子橋遺跡調査区位置図……1
Fig. 2　享和元年高知御家中等麁図……5
Fig. 3　寛文已酉高知絵図（一部）……6
Fig. 4　高知郭中図（一部）……6
Fig. 5　金子橋遺跡及び周辺の遺跡……7
Fig. 6　調査区位置図及び試掘坑配置図……8
Fig. 7　金子橋遺跡調査区及びグリッド設定図……9
Fig. 8　TP1～4・6セクション図……13
Fig. 9　TP1出土遺物実測図……14
Fig. 10　TP3・4・5出土遺物実測図……15
Fig. 11　TP6出土遺物実測図……16
Fig. 12　基本層準……18
Fig. 13　検出遺構全体図……19～20
Fig. 14　SK1・2平面図・セクション図……21
Fig. 15　SK1出土遺物実測図（1）……22
Fig. 16　SK1出土遺物実測図（2）……23

Fig. 17　SK2出土遺物実測図 (1) …… 24
Fig. 18　SK2出土遺物実測図 (2) …… 25
Fig. 19　SK2出土遺物実測図 (3) …… 26
Fig. 20　SK2出土遺物実測図 (4) …… 27
Fig. 21　SK3・5平面図・セクション図 …… 29
Fig. 22　SK3出土遺物実測図 (1) …… 31
Fig. 23　SK3出土遺物実測図 (2) …… 32
Fig. 24　SK3出土遺物実測図 (3) …… 33
Fig. 25　SK3出土遺物実測図 (4) …… 34
Fig. 26　SK3出土遺物実測図 (5) …… 36
Fig. 27　SK3出土遺物実測図 (6) …… 37
Fig. 28　SK3出土遺物実測図 (7) …… 38
Fig. 29　SK3出土遺物実測図 (8) …… 40
Fig. 30　SK3出土遺物実測図 (9) …… 41
Fig. 31　SK3出土遺物実測図 (10) …… 42
Fig. 32　SK3出土遺物実測図 (11) …… 44
Fig. 33　SK3出土遺物実測図 (12) …… 45
Fig. 34　SK3出土遺物実測図 (13) …… 46
Fig. 35　SK3出土遺物実測図 (14) …… 47
Fig. 36　SK3出土遺物実測図 (15) …… 48
Fig. 37　SK4平面図・セクション図 …… 49
Fig. 38　SK4・5出土遺物実測図 …… 51
Fig. 39　SK6平面図・セクション図 …… 52
Fig. 40　SK6出土遺物実測図 (1) …… 54
Fig. 41　SK6出土遺物実測図 (2) …… 55
Fig. 42　SK6出土遺物実測図 (3) …… 56
Fig. 43　SK7平面図・セクション図 …… 57
Fig. 44　SK7出土遺物実測図 …… 58
Fig. 45　SK8平面図・セクション図・出土遺物実測図 …… 59
Fig. 46　SK9～13平面図・セクション図 …… 60
Fig. 47　SK9出土遺物実測図 …… 61
Fig. 48　SK10・11出土遺物実測図 …… 62
Fig. 49　SK12出土遺物実測図 …… 63
Fig. 50　SK13出土遺物実測図 …… 64
Fig. 51　SK14～17平面図・セクション図 …… 65
Fig. 52　SK14・15出土遺物実測図 …… 66
Fig. 53　SK16・17出土遺物実測図 …… 67
Fig. 54　SK18出土遺物実測図 …… 68
Fig. 55　SK19出土遺物実測図 (1) …… 70
Fig. 56　SK19出土遺物実測図 (2) …… 71
Fig. 57　SD1～3セクション図 …… 72
Fig. 58　SD1出土遺物実測図 (1) …… 73

Fig. 59　SD1出土遺物実測図 (2) …… 74
Fig. 60　SD2出土遺物実測図 …… 76
Fig. 61　SD3出土遺物実測図 …… 77
Fig. 62　SD4・5セクション図 …… 79
Fig. 63　SD4出土遺物実測図 (1) …… 80
Fig. 64　SD4出土遺物実測図 (2) …… 81
Fig. 65　SD5出土遺物実測図 (1) …… 84
Fig. 66　SD5出土遺物実測図 (2) …… 85
Fig. 67　SD5出土遺物実測図 (3) …… 86
Fig. 68　包含層出土遺物実測図 (1) …… 87
Fig. 69　包含層出土遺物実測図 (2) …… 88
Fig. 70　撹乱層出土遺物実測図 (1) …… 90
Fig. 71　撹乱層出土遺物実測図 (2) …… 91
Fig. 72　撹乱層出土遺物実測図 (3) …… 92
Fig. 73　撹乱層出土遺物実測図 (4) …… 94
Fig. 74　撹乱層出土遺物実測図 (5) …… 95
Fig. 75　撹乱層出土遺物実測図 (6) …… 96
Fig. 76　撹乱層出土遺物実測図 (7) …… 97
Fig. 77　絵図にみる金子橋遺跡の変遷 (1) …… 135
Fig. 78　絵図にみる金子橋遺跡の変遷 (2) …… 136
Fig. 79　絵図にみる金子橋遺跡の変遷 (3) …… 137

写真図版目次

巻頭図版1　SK2遺物出土状況、SK3遺物出土状況
巻頭図版2　出土遺物 (木製品)
巻頭図版3　出土遺物 (陶磁器)
巻頭図版4　出土遺物 (陶磁器、土器)
PL. 1　調査区遠景 (北東より)、調査区風景 …… 157
PL. 2　完掘状況 (東部)、完掘状況 (西部) …… 158
PL. 3　調査区北壁、北壁セクション …… 159
PL. 4　SK1セクション及び遺物出土状況 (北より)、SK2遺物出土状況 …… 160
PL. 5　SK2完掘状況 (西より)、SK3遺物出土状況 (西より) …… 161
PL. 6　SK3遺物出土状況、SK3完掘状況 (西より) …… 162
PL. 7　SK4完掘状況 (西より)、SK6セクション (東より) …… 163
PL. 8　SK7完掘状況 (東より)、SD1検出状況 (東部) …… 164
PL. 9　SD1セクション (東より)、SD1完掘状況 (東より) …… 165
PL. 10　SD2セクション (南より)、SD3 (東より) …… 166
PL. 11　SD4セクション (北より)、SD4・2完掘状況 (南より) …… 167
PL. 12　SK8セクション (南より)、SK9セクション (西より)、SK10完掘状況 (東より)、
SK11セクション及び遺物出土状況 (西より)、SK11完掘状況 (南より)、
SK12・13完掘状況 (南より)、SK14完掘状況 (南より)、SK17セクション (南より) …… 168

PL. 13　SK2遺物出土状況、SK3遺物出土状況 …… 169
PL. 14　SK3遺物出土状況 …… 170
PL. 15　SK3遺物出土状況、SK6遺物出土状況 …… 171
PL. 16　SK9遺物出土状況、SK11遺物出土状況、SK13遺物出土状況、SK15遺物出土状況、
SD1遺物出土状況、SD2遺物出土状況、SD4遺物出土状況、包含層Ⅱ層遺物出土状況 …… 172
PL. 17　TP1・TP4～6・SK1出土遺物 …… 173
PL. 18　SK1・2出土遺物 …… 174
PL. 19　SK2出土遺物 …… 175
PL. 20　SK2・3出土遺物 …… 176
PL. 21　SK3出土遺物 …… 177
PL. 22　SK3出土遺物 …… 178
PL. 23　SK3出土遺物 …… 179
PL. 24　SK3出土遺物 …… 180
PL. 25　SK3・4出土遺物 …… 181
PL. 26　SK4・6出土遺物 …… 182
PL. 27　SK6～9出土遺物 …… 183
PL. 28　SK9・10・12・13出土遺物 …… 184
PL. 29　SK14～17・19出土遺物 …… 185
PL. 30　SK19出土遺物 …… 186
PL. 31　SK19・SD1・2出土遺物 …… 187
PL. 32　SD2・3出土遺物 …… 188
PL. 33　SD3～5出土遺物 …… 189
PL. 34　SD5・包含層出土遺物 …… 190
PL. 35　包含層・撹乱層出土遺物 …… 191
PL. 36　撹乱層出土遺物 …… 192
PL. 37　撹乱層出土遺物 …… 193
PL. 38　撹乱層出土遺物 …… 194
PL. 39　撹乱層出土遺物 …… 195
PL. 40　第六小学校児童の遺跡見学会 …… 196

表目次

Tab. 1～26　遺物観察表（陶磁器・土器）… 98～123
Tab. 27　遺物観察表（石製品・金属製品）… 124
Tab. 28　遺物観察表（瓦）…… 125
Tab. 29・30　遺物観察表（木製品）…… 126・127
Tab. 31　絵図と金子橋遺跡居住者の記載 … 134
Tab. 32　金子橋遺跡検出遺構（土坑）…… 142
Tab. 33　金子橋遺跡検出遺構（溝）…… 142
Tab. 34　金子橋遺跡SK2～4・6・7・9陶磁器・
土器の器種別出土点数と組成比 … 147
Tab. 35　金子橋遺跡SK2～4・6・7・9陶磁器・
土器の用途別出土点数と組成比 …… 148
Tab. 36　田村遺跡・陣山遺跡・金子橋遺跡陶磁器・
土器の器種別組成 …… 149
Tab. 37　金子橋遺跡SK2～4・6・7・9陶磁器の
生産地別出土点数と組成比 …… 152

第Ⅰ章　調査に至る経緯と経過

金子橋遺跡は高知市街地の中心部、高知城の南西に位置する。ここは、江戸時代には、上級・中級武士の居住専用区域とされた郭中の南西隅にあたり、近世の絵地図や古記録によって、近世初めから幕末まで武家屋敷が展開していたことが分かっている。しかし、これまで周辺地域での近世城下町の発掘調査は行われておらず、近世遺跡の実態については殆ど明らかにされていなかった。

2006年、高知市立第六小学校での屋内体育館及びプール改築工事が計画され、それに伴う埋蔵文化財の有無についての照会が高知市教育委員会を経由して、高知県教育委員会に対し提出された。これを受けて高知市教育委員会では試掘確認調査を6月5日から6月8日にかけて実施した。

工事予定地の8箇所に試掘坑を設定し、試掘調査を行った結果、北部棚の2箇所の試掘坑において近世武家屋敷関連とみられる土坑を検出し、その他の試掘坑からも近世の陶磁器や土器、木製品等の遺物が出土した。この結果を受けて、高知県教育委員会と高知市が協議を行い、工事掘削が遺構面へ及ぶ新体育館建設予定地の範囲について、高知市教育委員会が発掘調査を実施することとなった。本調査は6月12日から6月30日にかけて実施した。

なお、対象地はこれまで「郭中参考地」とされてきたものであるが、遺構、遺物の新たな発見により2006年6月から埋蔵文化財包蔵地として新設された。遺跡名称は近世以来の旧町名を用い「金子橋遺跡」とした。

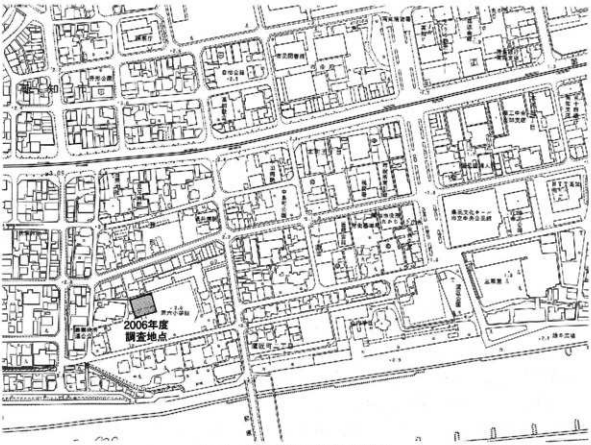


Fig.1　金子橋遺跡調査区位置図

第Ⅱ章　地理的・歴史的環境

1. 地理的環境

高知市は土佐湾に面し、東部には高知平野が広がり、市域の西部及び北部は東西に山地が連なる。河川は、鏡川が市の西北部から湾曲しながら東流して浦戸湾に注ぎ、国分川が南国市北部及び香美郡西部域から西流し、江の口川、舟入川を合わせて浦戸湾に注いでいる。現平野部のほとんどは、古くは内海であったが、その後鏡川などの堆積や隆起、干拓による埋め立てなどによって、近世以降ほぼ現在の状態になったものである。

金子橋遺跡が立地する高知市の中心市街地は、北部は標高400～600mの東西に連なる山地、南方を300m級の帯状の山地、西方をなだらかな丘陵によって囲まれた平野部にあり、周囲には大高坂山、小高坂山、能茶山、比島山、葛島山などの小分離丘陵が存在する。しかし、かつては鏡川によって形成された三角州上に広がる低湿地であったため、平野部の土地は総体的に低く、集中豪雨、台風、津波による水害が繰り返された。一方で、平野部に内陸深く入り込む浦戸湾は自然の良港となり、近世には、浦戸湾に注ぐ鏡川、江の口川の水運によって、交通至便の立地環境を得ることとなる。

2. 歴史的環境

周辺の遺跡

高知市中心部付近での旧石器時代の遺跡はまだ発見されていないが、縄文時代になると、高知市北部の丘陵に位置する福井遺跡、宇津野遺跡で縄文時代の遺物が検出されている。また、長浜チドノ遺跡から縄文前期の羽島下層式土器、正蓮寺不動堂前遺跡からは縄文中期初頭の舟元Ⅰ式土器や礫石錘、縄文後期～晩期の条痕文土器や磨研土器、高知市西部の柳田遺跡からは縄文後期～晩期の土器が出土している。

弥生時代には、福井遺跡、高知学園裏遺跡、初月遺跡、北秦泉寺遺跡など、丘陵沿いを中心に遺跡が増加する。また、柳田遺跡では弥生前期の大篠式土器などが出土している。弥生時代中期から後期にかけては、山地・丘陵部に立地する、かろーと口遺跡、城山遺跡、高天原遺跡などがある。注目されるものとして、県下最古の中広形銅矛2本が池地区の長崎より、県下唯一の有柄式石剣と片刃石斧が北秦泉寺より出土している。また、尾戸遺跡からも弥生前期の太型蛤刃石斧の出土が確認されている。

古墳時代に入ると北部山麓に吉弘古墳、愛宕不動堂前古墳、宇津野1号墳、2号墳等の後期古墳が点在する秦泉寺古墳群や、塚ノ原古墳群が存在する。また、中島町遺跡や西秦泉寺遺跡など、より低地での遺跡が確認され始める。

古代では、白鳳～奈良時代の瓦を出土する秦泉寺廃寺がある。この他にも、高知学園裏遺跡や東久万池田遺跡、吉弘遺跡、松葉谷遺跡等が知られている。記録の上では、高知市中心部の北西側に高坂郷が成立し、以後中世にかけて、南側の低湿地へと開拓が進んでいったものと推察される。

中世には、大高坂城跡、福井中城跡、万々城跡、安楽寺城跡など、多くの山城が丘陵部に立地す

るようになる。大高坂城跡は南北朝期に大高坂山にあった大高坂氏の居城であるが、永禄年間頃に長宗我部氏に破れ、その支配下となる。近年の高知城跡発掘調査では、長宗我部の時代に遡る天正期の石垣が検出され、桐文軒丸瓦も出土している。

近世城下町の形成

関ヶ原合戦後、土佐国を与えられた山内一豊は、慶長6年（1601）、長宗我部氏の居城であった浦戸城に入城した。その後、国内統治の要衝の地として大高坂山を城地に選び、同年9月に築城に着工した。慶長8年（1603）、本丸と二ノ丸が完成し、8月には山内一豊が新城に入城した。城山の名称も大高坂山を改めて「河内山」と命名し、慶長15年（1610）には「高智山」と改めた。

築城に並行して、城下町の造営も進められた。城の麓に内堀を巡らせるとともに、南の鏡川と北の江の口川を天然の外堀とし、東側と西側は新たに堀を設けて外堀とした。これらの外堀に囲まれる区域は郭中とし、上級・中級武士の居住区とした。さらに郭中を挟んで、西には上町、東には下町を配した。上町は主に足軽、武家奉公人など下士の者を住まわせ、下町は武士の生活を賄うための町人の居住地区が設けられた。上町、下町と郭中との境界は、東は廿代橋より南に堀詰を経て鏡川に至る線、西は江の口川より金子橋に至る線がこれにあたり、郭中との境には外堀とともに、幅2間、高さ1間の土堤を築いて両者を区画している。

また、城下町は低地に立地したため、鏡川（当時の潮江川）の洪水を防ぐことが急務とされた。そのため、城下の西端にあたる上町の思案橋から、東端の下町雑喉場越戸（人が渡る所）までの間に、大堤防が築かれ、さらに郭中部分には郭中堤防が設けられた。

寛文5年（1665）の『土陽顕秘録』によると、町数は、細工町、大超寺町、土橋町、籔田町、堀詰町、本町、堺町、水道町、通町、北奉公人町、南奉公人町、廿代町、蓮池町、朝倉町、弘岡町、大工町、要法寺町、掛川町、農人町、浦戸町、菜園場町、材木町、紺屋町、新市町、新町、種崎町、京町、唐人町の28カ町からなっている。以後近世を通じて町数は25町を前後しており、この時期に城下町の基本形が出来上がったと推定されている。

近世金子橋の景観

「金子橋」は、城下郭中の西南端にあたる町名(注1)で、名称は、郭中の西南端から外堀を渡り上町の通町へ通じる橋「金子橋」に由来するとされる。橋の名は東の橋元に「金子弥右衛門」なる武家が住んでいたことによると伝えられており、宝永年間（1704～1711）編纂の『土佐州郡志』(注2)には、「金子橋　長四間一尺廣二間　中鳴町西金子某カ宅ニ近シ」。文化12年（1815）編纂の『南路志』(注3)には「橋一ヶ所、長四間一尺并弐間、侍小路中鳴町方通丁へ渡ル。橋詰ニ金子某住宅、依之金子橋と云。金子橋」とある。

絵地図によると、寛文9年（1669）の『寛文己酉高知絵図』（Fig.3）では、当地に「金子」の武家名がみえるが、町名はみられず、享和元年（1801）『高知御家中等禽図』（Fig.2）になると、「カネコ橋」、天保12年（1841）の『城下町絵図』では「金子ハシ」とみえ、前記絵図の金子家屋敷はすでにみえない。

また、町の南はすぐ鏡川の大堤防に接していたので、水防用具蔵が設けられていた。水防蔵は、金子橋越戸と掛川町越戸に設置されたもので、洪水の警戒態勢にあたる水防組が編成され、増水時には御城の鐘楼からの合図で武士、町人が水丁場（定められた水防の受持区域）へ出勤し、水防作

業にあたっていた。また町の南には、鏡川から引水する、郭中用水の取水水門も設けられていた。

居住者の変遷

近世の金子橋では、御馬廻など150～600石の上級武士や、御小姓組など30～300石の中級武士の屋敷が並んでいた。

平成18年度調査地点となった現在の第六小学校敷地の位置を近世の絵地図に照合させると、寛文9年（1669）の『寛文己酉高知絵図』（Fig.3）では、北側東隅に「小八木務右衛門」、その西に「金子傳十郎」、南側東隅に不明屋敷地、その西に「出口五右衛門」「松浦平左衛門」の屋敷名が記され、南端には東西方向に設けられた堀と土堤が描かれている。さらに南は東西の通りをはさんで屋敷と郭中堤防が描かれている。続いて、享和元年（1801）の『高知御家中等鳧図』（Fig.2）では、北側東隅に「小八木五衛」と「小八木寿之助」、その西に「馬場源助」「前野頼助」の屋敷、南側東隅には「生駒熊弥太」屋敷があり、土堤と緑地を挟んでその西に「寺村命助」の屋敷が記されている。また、幕末の『高知郭中図』（Fig.4）では、北側東隅から600石取りの「小八木五兵衛」、「小八木繁猪」、その西に「馬場」、南側は東隅から270石の「麻田楠馬」、300石の「奥村小十郎」、「森田貞馬」、「日比庄右衛門」の武家名が記されている。

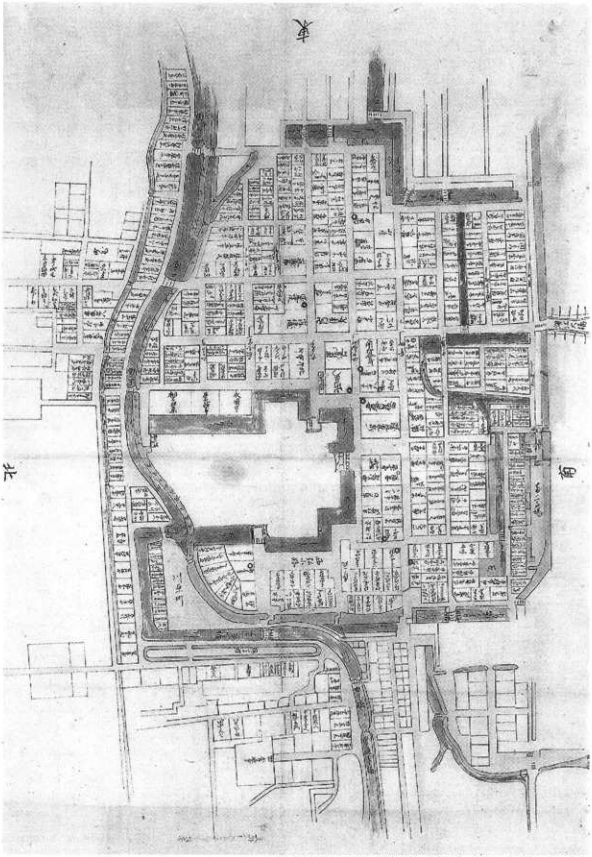
これらの絵図によると、本調査区の立地する区画には、御馬廻の小八木家の屋敷が近世を通じて存在した以外は、上級～中級武士の屋敷が入れ替わっている。今回の調査区はこの一角のうち特に北西側にあたっており、17世紀末頃には知行300石で御馬廻の「金子傳十郎」、19世紀初頭頃には御小姓組の「馬場源助」屋敷地の一角にあたっていたと考えられる。

[註]

1) 昭和41年の町名改正により、現在の町名は「升形」へと変更されている。
2) 『土佐州郡志』は宝永年間（1704～1711）に各村から差し出された『宝永風土記』をもとに山内家儒者緒方宗哲が編纂した官撰地誌とされる。
3) 『南路志』は文化12年（1815）、高知城下の豪商美濃家の武藤致和・半道父子が編纂。

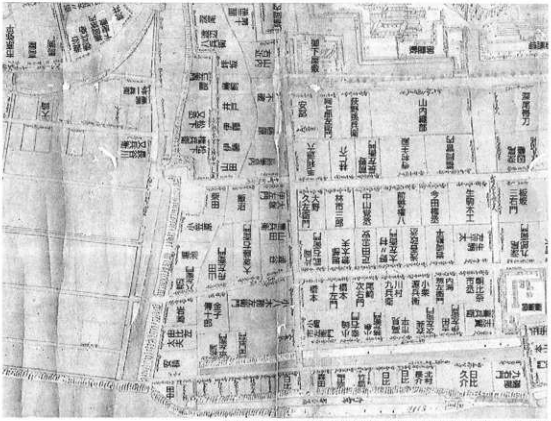
[参考文献]

『高知県の地名』平凡社1983年
『角川日本地名大辞典39高知県』角川書店1986年
『高知市史　上巻』高知市1958年
『土佐国史料集成－南路志』高知県立図書館1991年
『土佐州郡志－復刻版－』土佐史談会1983年
『高知城下町読本－改訂版－』土佐史談会・高知市教育委員会2004年
『特別展－絵図の世界』安芸市歴史民俗資料館1998年



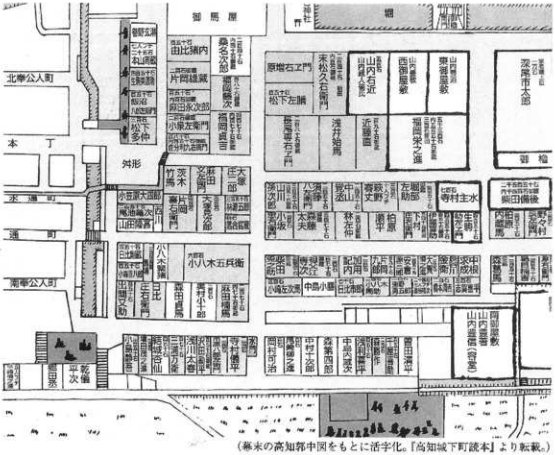
（安芸市立歴史民俗資料館所蔵。『特別展－絵図の世界』より転載。）

Fig.2　享和元年高知御家中等焦図



（高知市民図書館所蔵のものを活字化。『高知城下町読本』より転載。）

Fig.3　寛文己酉高知絵図（一部）



（幕末の高知郭中図をもとに活字化。『高知城下町読本』より転載。）

Fig.4　高知郭中図（一部）

(S＝1/50,000)

Fig.5　金子橋遺跡及び周辺の遺跡

No.	遺跡名	時代	No.	遺跡名	時代	No.	遺跡名	時代
008	構田遺跡	縄文～古墳	043	高知学園裏遺跡	弥生～古代	073	西奏泉寺遺跡	古墳
016	舟岡山遺跡	弥生	044	福井西城跡	中世	074	奏泉寺別城跡	中世
017	舟岡山古墳	古墳	045	福井中城跡	中世	075	奏泉寺廃寺跡	古代
018	神田南城跡	中世	046	福井元尾城跡	中世	076	土居の前古墳	古墳
019	ケジカ屋遺跡	弥生	047	横内遺跡	弥生	077	前里城跡	中世
020	高座古墳	古墳	048	かろーと口遺跡	弥生	078	宇津野2号墳	古墳
021	鷲尾城跡	中世	049	福井別城跡	中世	079	宇津野1号墳	古墳
022	鷲泊橋付近遺跡	弥生～中世	050	福井古墳	古墳	080	宇津野遺跡	縄文
023	シルタニ遺跡	弥生・古代	052	中の谷遺跡	弥生	081	奏泉寺新屋敷古墳	古墳
024	高神遺跡	古墳・古代	053	高武保宇城跡	中世	082	吉弘遺跡	古代
025	神田遺跡	弥生～中世	055	福井遺跡	縄文～中世	083	松葉谷遺跡	古代～中世
026	神田ムク入道遺跡	弥生～中世	056	初月遺跡	弥生	084	薬野遺跡	古代
027	鴨部城跡	中世	057	万々城跡	中世	085	日の岡古墳	古墳
028	肥冶屋敷遺跡	古代～中世	058	神森城跡	中世	086	北奏泉寺遺跡	弥生
029	鴨部遺跡	弥生	060	南鉾屋敷跡	近世	087	淋谷古墳	古墳
030	神田旧城跡	中世	061	中島町遺跡	古墳	088	奏泉寺城跡	中世
031	韮系山廟跡	近世	062	国沢城跡	中世	089	奏泉寺仁井田神社裏古墳	古墳
032	石立城跡	中世	063	大高坂城跡	中世	090	荊野城跡	中世
033	久寿崎ノ丸遺跡	弥生～中世	064	弘人屋敷跡	近世	106	竹林寺	古代
034	小石木町遺跡	弥生	065	帯屋町遺跡	古墳	133	一宮城跡	中世
035	小石木山古墳	古墳	066	尾戸遺跡	弥生	136	一宮別城跡	中世
036	潮江城跡	中世	067	尾戸廟跡	近世	137	一宮2号墳	古墳
038	上本宮町遺跡	弥生	068	安楽寺山城跡	中世	139	土佐神社西遺跡	古代～中世
039	杓田遺跡	古墳	069	東久万池田遺跡	古代～中世	146	高知城伝下屋敷跡	古墳～近世
040	井口城跡	中世	070	愛宕不動堂前古墳	古墳	147	柏尾山城跡	中世
041	塚の原1号墳	古墳	071	愛小学校校庭古墳	古墳			
042	塚の原2号墳	古墳	072	愛宕神社裏古墳	古墳			

第Ⅲ章　調査の方法

本調査においては、重機を用いて表土と攪乱層を除去し、その後、人力にて検出作業と遺構掘削を行った。近世遺構面以下の無遺物層については、重機による掘削を行って、遺構と遺物の有無を確認した。

検出された遺構については、土層観察を行うとともに土層図、平面図を作成し、写真撮影を行った。遺構の測量については、世界測地系公共座標に基づく4×4mの方眼区画を設定し、それをもとに実測を行った。平面実測及び土層断面図については、20分の1を基本に適時任意の縮尺を用いた。

基準点及び測量杭の設置に関しては、高知市教育委員会が㈱ミタニ建設工業に委託して行った。水準測量については、一等水準点5002（H=3.259）より導いた。基準点については、第六小学校敷地内に、GPS測量による3級基準点（T－1・T－2・T－3の3点）を設置した。GPS測量の観測不可箇所については、トータルステーションにて観測を行い4級基準点（T－4・T－5・T－6・T－7の4点）を設置した。これらの基準点をもとにして、世界測地系公共座標X=61640.000,Y=2620.000の交点（A1）を原点とする4×4mの方眼区画を設定した。区画は東西方向にアルファベット、南北方向に算用数字を付して表記し、両者の組み合わせで北西隅を基準点とする呼称とした。（Fig.7）

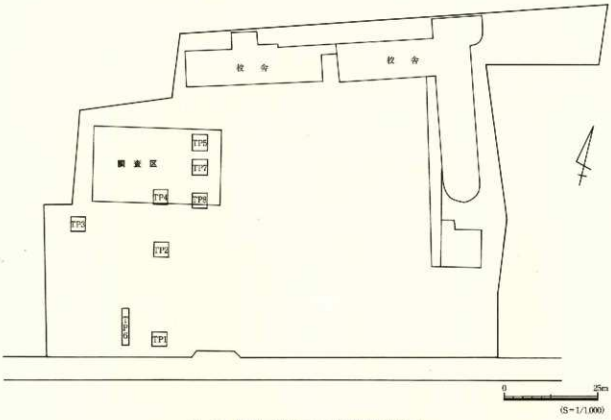
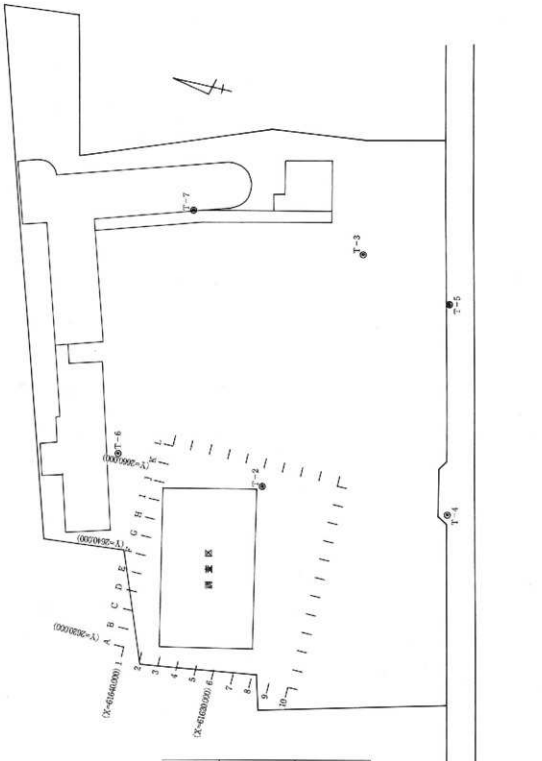


Fig.6　調査区位置図及び試掘坑配置図



測点	X座標	Y座標
T－1	61961.574	2610.381
T－2	61619.369	2660.042
T－3	61610.178	2712.785
T－4	61579.897	2883.762
T－5	61589.855	2706.776
T－6	61950.923	2659.659
T－7	61647.106	2713.255

Fig.7　金子橋遺跡調査区及びグリッド設定図

第Ⅳ章　調査の成果

第1節　試掘調査

試掘確認調査では、第六小学校校庭の南西部と北西部の8箇所に試掘坑を設定した。(Fig.6) 校庭南部側については、遺跡面への工事による掘削等の影響は殆どないことが明らかになったため、本調査の対象外となったが、南部側に設けられた数箇所の試掘坑では、本調査区周辺での近世遺跡の状況を把握できる良好な資料が得られている。そのため、ここでは、特に南部側に設定した試掘坑TP1～4・6の検出状況について、その概要を報告する。また、試掘坑TP1～8の出土資料についてもあわせて提示する。

なお、今回の調査地点を近世の絵地図 (Fig.2～4) と照合させると、現在の第六小学校敷地の一帯には武家の屋敷地が並ぶが、その南端側には東西に延びる堀と土堤が描かれている。試掘坑のうち、TP1とTP6はちょうど土堤の描かれた位置に近く、砂礫層の上面に堆積するⅡ層がこれに関連する堆積層であった可能性が考えられる。

TP1 (Fig.8・9)

南東部に設けられた試掘坑である。TP1では現表土下約1.6m (標高1.3m) まで近代以降の整地層 (Ⅰ－1・Ⅰ－2層) があり、その直下にて、近世の遺物を含む褐灰色砂礫層 (Ⅱ－1層)、褐灰色粘質シルト層 (Ⅱ－2層)、円礫を含む褐灰色シルト層 (Ⅱ－3層)、砂層 (Ⅲ層) を検出した。Ⅱ層とⅢ層は南に向かって緩やかに下降しており、砂層 (Ⅲ層) 上面の高さは北部側で標高0.8m、南部側で標高0.2mとなっている。Ⅱ－1・Ⅱ－2層からは主として19世紀代の近世陶磁器、Ⅱ－3層からは17～18世紀代の近世陶磁器が出土している。Ⅲ層は無遺物である。

図示したものは、1～14である。このうち、3・4・5・7・10がⅡ－1層、11・13・14がⅡ－2層、1・2・6・8・9・12がⅡ－3層からの出土である。また1・2・6・8・9・12はⅡ－3層内でまとまった状態で出土している。

1～7・11・12は磁器。

1は肥前産の染付猪口である。外面と高台内に略化した文様を描く。2は肥前産の染付端反形小杯で、外面草文。高台施釉で、高台に砂が付着している。3は肥前産の口縁部輪花形の染付鉢。内面に松、竹、梅、外面に雲状の文様を描く。4は肥前系の染付蓋で、広東形碗の蓋になる。内外面に略化した不明文様が描かれている。呉須は青灰色に発色する。5は肥前系の染付広東形碗。6は肥前産の蓋物で、外面に稲束文を描く。漆継痕を認める。7は肥前産の銹釉形小瓶。蛸唐草と梅文を描いている。11は青磁の香炉又は火入れ。外面に半透明の明緑灰色の釉を施釉している。12は染付又は白磁の小瓶で、畳付に砂が付着している。

8～10・13～14は陶器。

8は尾戸窯の灰釉丸碗。内外面に緩やかなロクロ目をもつ。高台内を曲線的に削り出し、高台内に渦状の鏡痕を残す。灰釉は灰白色を帯びる半透明の釉で1㎜前後の細かい貫入が入る。9は関西系のせんじ碗。外面に多段の強いロクロ目。灰釉は灰オリーブ色を帯びる光沢の強い透明の釉で2～3㎜大の粗い貫入が入る。胎土は灰白色を呈する。10は中碗の底部で、内底に渦状のロクロ目をもつ。

高台内は鉋によって渦状に削り出されている。釉は焼成不良気味で白濁するが、部分的に黒褐色に発色している。

13は瀬戸・美濃産の灰釉徳利。灰釉はオリーブ色に発色し厚く掛った部分は白色に発色する。外面に釘彫痕を認める。14は関西系の鉄釉甕で、口縁部T字状。鉄釉はにぶい赤褐色に発色する。胎土は灰白色である。

TP2 (Fig.8)

中央部に設けられた試掘坑である。近代以降の撹乱と整地層（Ⅰ－1・Ⅰ－2層）は現表土下約1.5m（標高1.4m）まで及んでおり、その下面には無遺物の砂礫層（Ⅳ層：標高1.4m以下）が堆積する。Ⅳ層上面では近代の瓦溜1基を検出している。近代以前の遺構、遺物は確認できていない。

TP3 (Fig.8・10)

西部に設けられた試掘坑である。現表土下では、近・現代の遺物と瓦片を多量に含むシルト層（Ⅰ－2・Ⅰ－3層）が堆積しており、Ⅰ－2層下面で近代の埋桶を検出している。標高0.6mより下の層位では灰黄褐色砂礫層（Ⅳ層）が堆積しており、ここから近世陶磁器片が少量出土している。

図示したものはⅠ層出土の巴文軒丸瓦（22）、平瓦（24）である。24は側面に「アキ五」印銘をもつ。

TP4 (Fig.8・10)

中央部に設けられた試掘坑である。TP2と同様に、近代以降の撹乱と整地層（Ⅰ層）が標高1.6mの深さまで及んでおり、その下面は無遺物のシルト層（Ⅱ層：標高1.4～1.6m）と砂礫層（Ⅳ層：標高1.4m以下）となっている。出土遺物はⅠ層からのみであり、Ⅱ・Ⅳ層からの出土は確認できていない。

図示したものは、TP4のⅠ層出土の17である。17は外面に如意頭文、内面に松と鹿。摘み内に銘をもつ。

TP6 (Fig. 8・11)

調査区の南部に設けられた試掘坑である。TP1で近世の堀又は流路に伴うとみられる堆積層の一部を確認したため、その北岸を確認するために南北10mにわたって試掘坑を設け、堆積状況の確認を行った。砂礫層（Ⅳ層）は北側で標高1.6m、南側で標高0.6mの高さで検出されており、南に向かって緩やかに下降している。このⅣ層の上位には、黒褐色粘質シルト層（Ⅱ－2層）が部分的に堆積しており、近世の遺物が多く含まれている。

図示したものは25～43である。25～43はいずれもⅡ－2層からの出土である。

25～37・43は磁器。

25は染付の丸形大碗。外面に草花文、高台内には圏線と略化した「大明年製」銘を施す。肥前産で18世紀前半の製品である。26は肥前波佐見産のくらわんか手、染付丸碗。外面は草花文か。27は肥前産又は肥前系の広東形碗である。28は肥前系の筒型碗で、18世紀末～19世紀初頭。腰が張り高台は僅かに外方へ張り出している。外面と見込みに野菜文を描く。呉須は暗緑灰色に発色する。29は肥前波佐見産の青磁蛇の目釉剥ぎ小皿。青磁釉は明緑灰色に発色し、釉剥ぎ部に砂が付着している。外面下半無釉。30は初期伊万里の端反形小皿。内面に菊花重ね文、外面に宝文、高台内

に「製」銘を施す。肥前産で1640～1650年代。31は染付腰折形猪口で、高台内に「大明年製」銘をもつ。肥前産17世紀後葉～18世紀前半。32は肥前産の白磁猪口である。33・34は肥前産の白磁又は染付の小杯。33は高台施釉で、釉は白濁する。34はヘラ彫りによる縦筋を施すもので、肥前産1630～1640年代の製品である。35は白磁又は染付の小杯。36は染付小杯である。37は肥前産の染付仏飯器である。43は三足付の青磁皿。見込みを蛇の目釉剥ぎの後、鉄錆を刷毛塗りし、ヘラ彫りによる波状文を施す。外底には畝面の三足を貼付する。畳付外側には面取りを施す。酸化焼成気味で、青磁釉は浅黄色に発色している。肥前波佐見の製品で1640～1650年代のものである。

38～42は陶器。

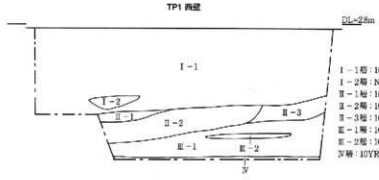
38は肥前産の灰釉丸碗で、高台施釉。灰釉はにぶい黄色を帯びる透明の釉で2㎜前後の粗い貫入が入る。39は尾戸窯の灰釉丸碗で、高台無釉。内外面にごく緩やかなロクロ目が残り、畳付外側にナデを施す。高台内は曲線的に削り出しており、高台内に渦状の鏝痕の一部が見える。40は肥前産の白化粧土刷毛目の碗で、高台施釉。胎土は灰黄色を呈する。41は京焼の灰釉碗。高台内を鋭角的に削り出し、高台内は平坦である。高台内に「清□」とみられる銘印の一部が見える。42は京都系の灰釉皿。高台内を鋭角的に削り出し、畳付外側を小さく面取る。

TP5出土の遺物（Fig.10）

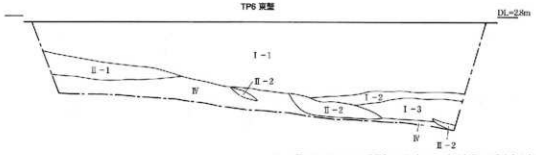
この他、TP5Ⅱ層出土の15・16・18～21、Ⅰ層出土の23を図示している。

15は染付丸碗で、外面にコンニャク印判による文様、高台内に「大明年製」銘を施す。肥前産1690～1730年代の製品である。16は肥前波佐見産の草花文丸碗。透明釉は白濁し、畳付に砂が付着する。18は白磁又は染付の猪口。口縁部端反形。19は肥前産の染付筒亜形大瓶。外面は区画間に鳥と草花を描く。1660～1670年代のものである。20は唐津系の鉄釉碗で16 世紀末～17世紀前葉。畳付外側に大きく面取りを施している。高台無釉。胎土はにぶい黄橙色。鉄釉は黒褐色に発色する。21は肥前産の灰釉丸碗で、17世紀後半～18世紀前半。高台施釉。灰釉は灰黄色を帯びる透明の釉で2～3㎜大の粗い貫入が入る。

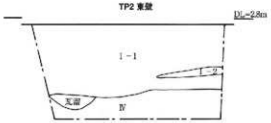
23は平瓦で、「アキ福」銘をもつ。高知県安芸市の製品である。



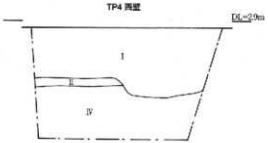
Ⅰ－1層：10YR4/2 灰黄褐色砂質シルト（1～5cm大の円礫を多く含む。近代の遺物を含む。）
Ⅰ－2層：N6/ 灰色砂
Ⅱ－1層：10YR4/1 褐灰色砂礫（粗砂に1～3cm大の円礫を多量に含む。近世の遺物を含む。）
Ⅱ－2層：10YR4/1 褐灰色粘質シルト（近世の遺物を含む。）
Ⅱ－3層：10YR4/1 褐灰色シルト（1cm前後の円礫を含む。近世の遺物を含む。）
Ⅲ－1層：10YR6/3 にぶい黄橙色細砂
Ⅲ－2層：10YR5/1 褐灰色粘質シルト
Ⅳ層：10YR4/3 にぶい黄褐色砂礫（粗砂に1～5cm大の円礫を多量に含む。）



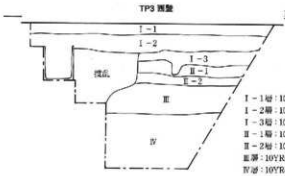
Ⅰ－1層：10YR4/3 にぶい黄褐色シルト（1～5cm大の角礫、円礫を多く含む。）
Ⅰ－2層：10YR5/1 褐灰色細砂
Ⅰ－3層：10YR5/2 灰黄褐色粗砂（粘質シルトと細砂が混じる。0.5～1cm大の円礫を含む。）
Ⅱ－1層：10YR6/4 褐色シルト
Ⅱ－2層：10YR3/2 黒褐色粘質シルト（炭化物を含む。近世の遺物を多く含む。）
Ⅳ層：10YR4/3 にぶい黄褐色砂礫（粗砂に1～3cm大の円礫を多量に含む。）



Ⅰ－1層：10YR4/3 にぶい黄褐色シルト（近代の遺物を含む。）
Ⅰ－2層：10YR4/1 褐灰色砂
Ⅳ層：10YR4/2 にぶい黄橙色砂礫（シルトに粗砂、1～3cm大の円礫を多量に含む。）



Ⅰ層：10YR4/2灰黄褐色シルト（1～2cm大の円礫・礫砂を少量含む。）
Ⅱ層：10YR5/2灰黄褐色シルト
Ⅳ層：10YR3/2黒褐色砂礫（粗砂に1～3cm大の円礫を多量に含む。）



Ⅰ－1層：10YR4/2灰黄褐色シルト（1～5cm大の円礫を多く含む。）
Ⅰ－2層：10YR4/1 褐灰色シルト（2～3cm大の円礫を多く含む。近代の遺物と瓦片、煉瓦を多量に含む。）
Ⅰ－3層：10YR3/2黒褐色シルト（炭化物を少量含む。）
Ⅱ－1層：10YR4/3 にぶい黄褐色粘質シルト（1cm前後の角礫、円礫を含む。）
Ⅱ－2層：10YR4/3 にぶい黄褐色粘質シルト
基盤：10YR5/3 にぶい黄褐色シルト質砂
Ⅳ層：10YR4/2灰黄褐色砂礫（粗砂に1～5cm大の円礫を多量に含む。近世の遺物を少量含む。）

Fig.8　TP1～4・6セクション図

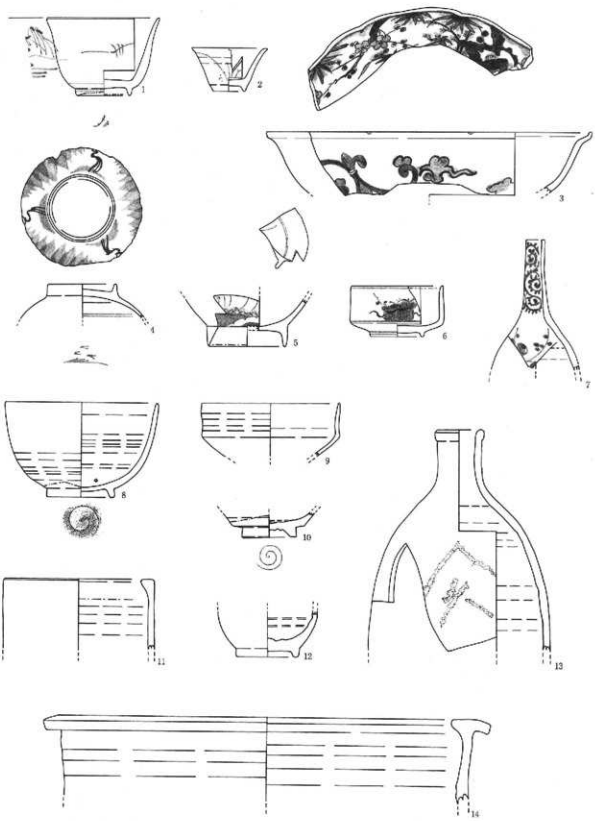


Fig.9　TP1出土遺物実測図

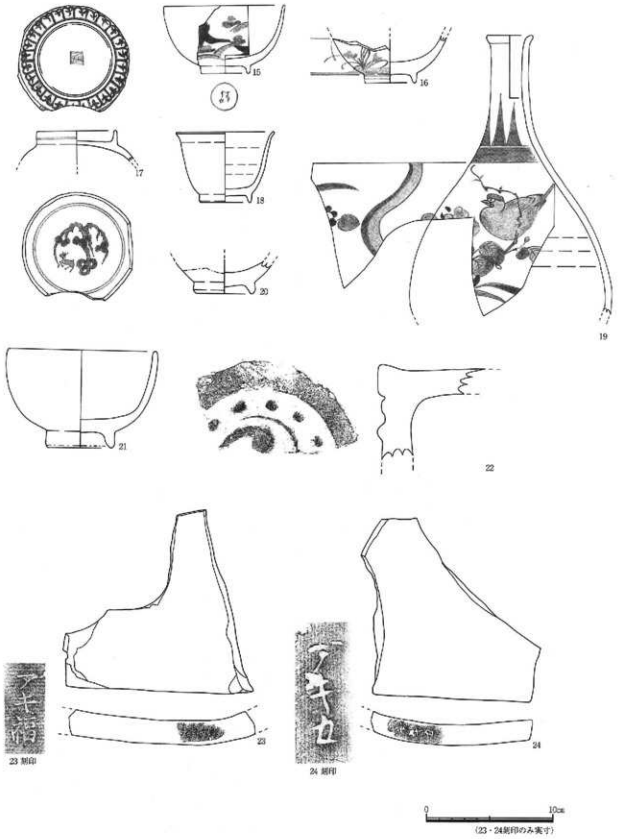


Fig.10　TP3・4・5出土遺物実測図

TP3 (22・24), TP4 (17), TP5 (15・16・18～21・23)

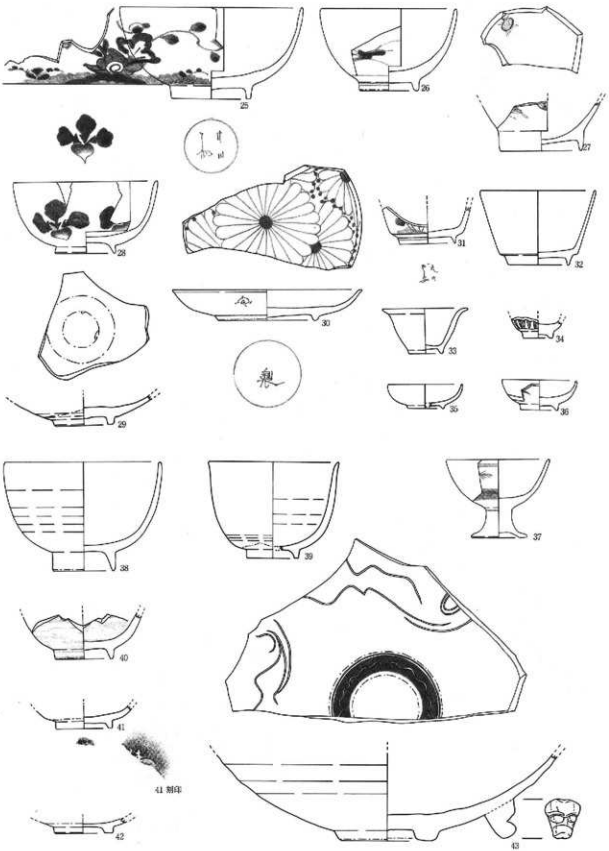


Fig.11　TP6出土遺物実測図

第2節　基本層準

本調査区は近代以降の撹乱が著しく、特に南部側と西部側では近世の遺物包含層が強く削平されている。そこで、包含層が比較的良好に残存した調査区の北壁と東壁の北側部分にて堆積状況の観察を行った。各堆積層の内容は次の通りである。

Ⅰ－1層：灰黄褐色シルト（1～3cm大前後の円礫を多く含む。部分的に橙色土が入る。）

Ⅰ－2層：暗褐色シルト層（1～3cm大前後の円礫を多く含む。）

Ⅱ層：灰黄褐色シルト（1cm前後の角礫、円礫を含む。）

Ⅲ層：暗灰黄色砂

Ⅳ層：暗灰黄色砂礫（粗砂に2～3cm大の円礫を多量に含む。）

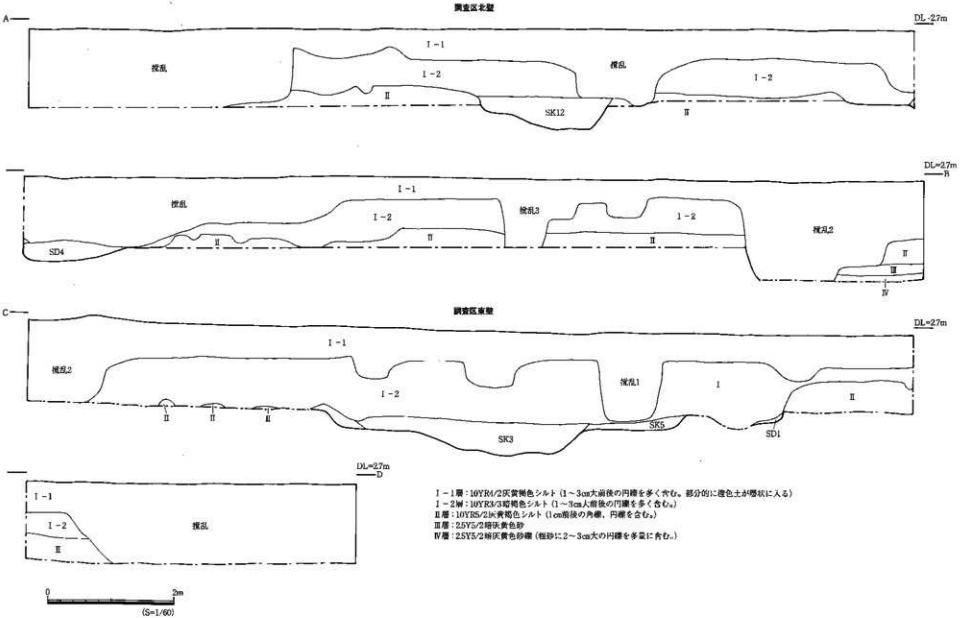
Ⅰ－1層は現代、Ⅰ－2層は近・現代の整地層で、瓦片、煉瓦、陶磁器など近世から現代までの遺物が多く含まれる。このうち近世のものでは、江戸後期以降の遺物片が特に多く混在している。Ⅱ層は近世の遺物包含層にあたり、主に江戸前期から後期までの遺物片を含んでいる。Ⅲ層とⅣ層は近世以前の氾濫堆積層とみられ、無遺物である。

全体をみると、現地表は現代の整地層（Ⅰ－1層）によって標高2.6m前後の高さまで嵩上げされており、その下面で近・現代の整地層（Ⅰ－2層）がほぼ標高2.1m前後の高さまで堆積している。これらの近・現代整地層と撹乱層は、浅い所で標高1.8m、深い所では標高1.3m前後の面まで及んでおり、近世の遺物包含層はその下面にて検出されている。今回確認できた近世の遺構群は、殆どが標高1.4～1.5m前後の面で検出されたものであるが、多くは上面をかなり削平されており、近世の生活面は標高1.8mから上の面に存在したと推察される。そのため、本調査区内の遺構についても、浅い面での遺構はすでに消失したものが多いと予想される。

近世包含層（Ⅱ層）の最下面は標高1.3m前後にあたり、以下では氾濫堆積とみられるⅢ・Ⅳ層が堆積する。なお、このⅡ層とⅢ・Ⅳ層との境界面については、事前の試掘調査でも確認できており、西部に設定したTP3では標高1.2m、中央部に設定したTP4では標高1.4mとほぼ同様の高さとなっている。一方南部に設定したTP1とTP6では、TP1北端で標高0.8m、南端で標高0.2m、TP6北端で1.6m、南端で0.6mと、地形が南に向かって緩やかに落ち込んでいる様子が確認された。Ⅲ・Ⅳ層はほぼ無遺物であるが、調査区西側に設定したTP3では標高1.2m～標高－0.6mの間で砂層と砂礫層の堆積が確認されており、砂礫層内から近世の遺物が少量出土している。

こうした状況から、調査区周辺の地域が居住域として安定し始めるのは近世以降であり、それ以前には、南に近接する鏡川（当時の潮江川）の氾濫を繰り返し受ける立地環境にあったと推定される。

Fig.12 基本層序



I－1層：10YR4/2灰黄褐色シルト（1～3cm大前後の円礫を多く含む。部分的に褐色土が帯状に入る）
I－2層：10YR5/3暗褐色シルト（1～3cm人前後の円礫を多く含む。）
II層：10YR5/2灰黄褐色シルト（1cm前後の角礫、円礫を含む。）
III層：2.5Y5/2暗灰黄色砂
IV層：2.5Y5/3暗灰黄色砂礫（粗砂に2～3cm大の円礫を多量に含む。）

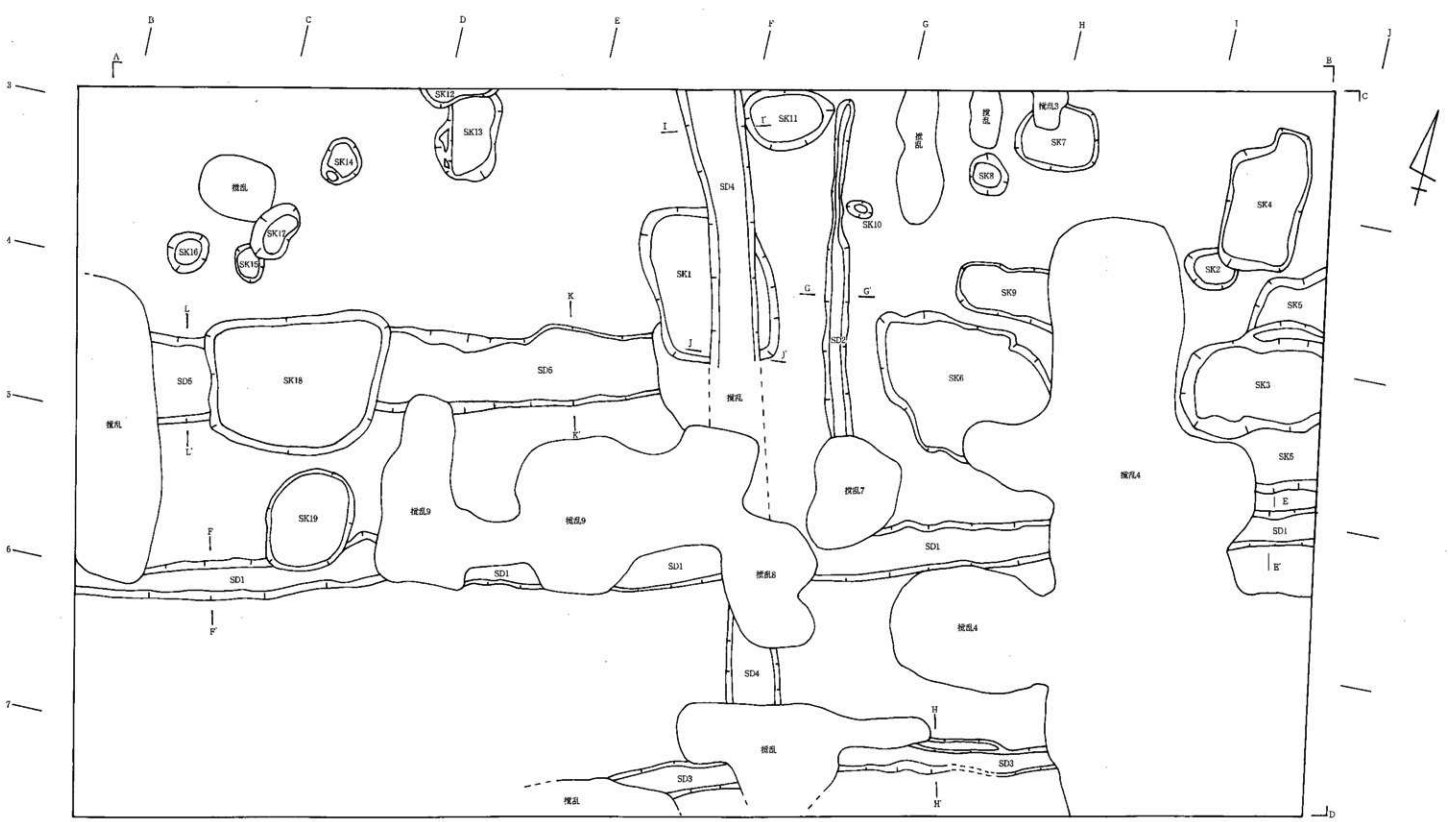


Fig.13　検出遺構全体図

0　4m
(S=1/100)

第3節　遺構と遺物

基本層準の項で触れたように、本調査区は近代以降の攪乱が著しく、特に南部側と西部側では相当部分が攪乱され、遺構検出作業ができない状況であった。近世の遺構面が残存した北部側においても、上面の削平によって、検出できた遺構は浅いものが多い。

こうした中、調査区北部側を中心に、近世の土坑19基、溝5条等の遺構を検出した。溝については、東西と南北方向の溝がほぼ垂直に交差しており、軸方向が現代の街区ともほぼ揃っていることから、当時の屋敷地割りの区画溝の役割を果たしていた可能性が考えられる。

(1) 土坑

SK1 (Fig.14・15・16)

調査区西部、E－3グリッドで検出された土坑である。平面形は隅丸方形を呈し、検出規模は長軸4.2m、短軸の確認長3.3m、深さ22cmを測る。断面形態は皿状で、壁は緩やかに立ち上がり、床面はほぼ平坦である。埋土は1層：にぶい黄褐色粘質シルト、2層：灰黄褐色粘質シルトであり、埋

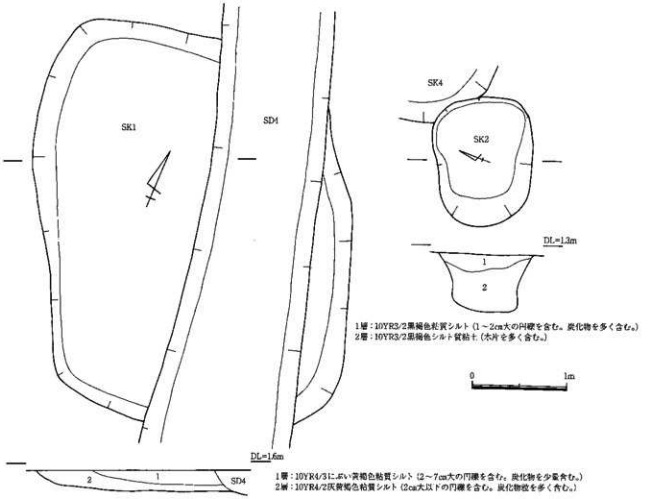


Fig.14　SK1・2平面図・セクション図

土中に近世の遺物を含んでいる。切り合い関係では溝SD4に切られており、これに先行する。また東西に延びる溝SD5とも切り合うとみられるが、近代以降の攪乱により前後関係は不明である。

出土遺物は磁器染付中碗・小碗・碗蓋・小皿・猪口・蓋物、白磁中皿・小杯・鉢・猪口・壺、青磁香炉又は火入れ、陶器中碗・小碗・小皿・鉢・鬢水入れ・擂鉢・蓋・壺・壺又は甕、陶器色絵小碗、土師質土器杯・小皿、鉄釘である。

図示したものは、44～64である。

44～53は磁器。53は肥前系、その他は肥前産である。

44・45は染付碗。44は丸碗で外面にコンニャク印判による草花文と筆描きによる松葉を描く。高台内に福。45は薄手の丸碗で山水文を描く。18世紀前半の製品である。47は白磁中皿で、口縁部折縁形。釉は明緑灰色を帯びている。肥前で1630～1640年代に製作されたものである。48は初期伊万里の染付小皿で、線描による地埋めと菊花文、花弁文を描く。高台には粗い砂が付着している。1610～1630年代の製品である。49は白磁小杯である。高台無釉。肥前産で17世紀後半のもの。46・

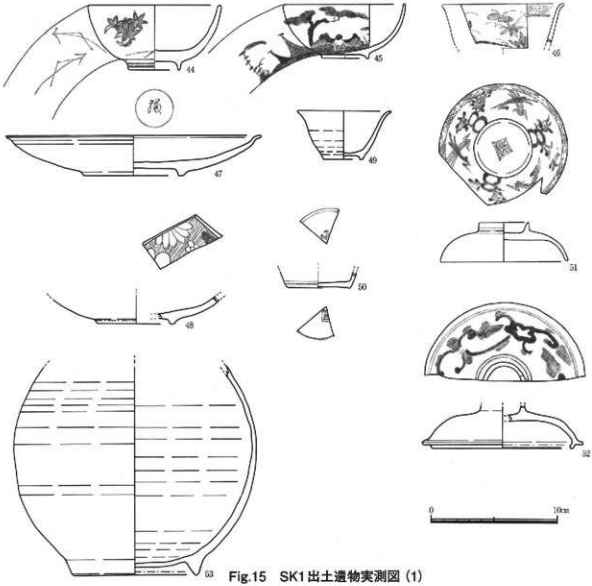


Fig.15　SK1出土遺物実測図（1）

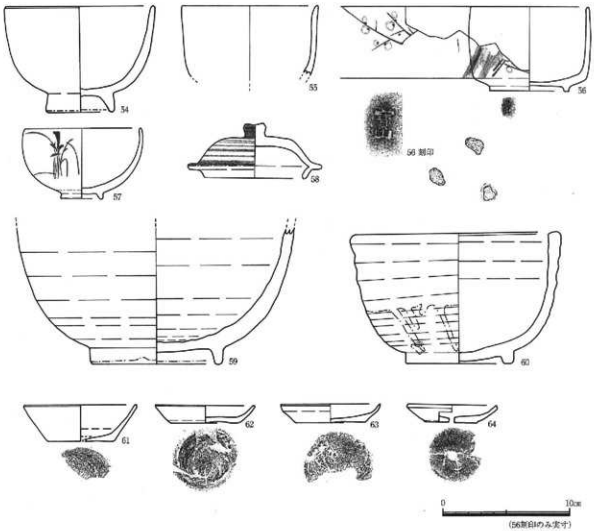


Fig.16　SK1出土遺物実測図（2）

50は染付猪口。46は外面に蝶と草花、口縁部内面に四方樽を描く。50は見込みに筆描きによる五弁花、高台内には角枠内渦福。51は中碗の蓋で、外面に四方樽、花卉、松葉を描く。摘み内には二重角枠内渦福。52は蓋物の蓋で、漆継痕を認める。肥前産で18世紀前半のもの。53は肥前系の青磁の瓶で、釉は明緑灰色に発色する。18世紀後半～19世紀前半の製品である。

54～60は陶器。

54～57は碗である。54は肥前産の灰釉丸碗で、高台施釉。55は尾戸窯の灰釉碗である。体部外面には緩やかなロクロ目が残り、灰白色を帯びる半透明の釉を施釉している。56は京焼の灰釉半筒形碗で、梅花を呉須、枝を鉄錆で描き分けている。高台内に「寶山」銘印をもつ。17世紀後半～18世紀初頭のものである。57は京都系の灰釉半球形小碗で、鉄錆で略化した芭蕉文を描く。18世紀中葉～後半。58は肥前産の陶器蓋で白化粧土刷毛目を施す。59は鉄釉の壺。体部内外面にロクロ目を残す。高台内は曲線的に削り出し、畳付はナデにより丸みをもたせている。鉄釉は暗赤褐色に発色し、胎土は灰黄色を呈する。60は灰釉の鉢で、内底に灰白色の砂目を残す。内外面に強いロクロ目。畳付両側はナデを施し丸みをもたせている。釉は浅黄色を帯び粗い貫入が入る。

61～64は土師質土器。

61は土師質土器杯。62～64は土師質土器小皿である。64は底部中央に焼成後穿孔を穿つ。63は口縁部に灯芯油痕を認める。

図示したものの他にも、肥前産の染付網目文碗、染付丸碗、肥前波佐見産の染付蛇の目釉剥ぎ小皿、京都系の色絵陶器半球形小碗、肥前産の灰釉丸碗、唐津系灰釉陶器小皿、備前焼擂鉢等の製品が出土している。なお、肥前産の染付広東形碗、端反形碗は確認できていない。

切り合い関係及び出土遺物の内容からみて、SK1は18世紀後半に比定される。

SK2 (Fig. 14・17～20)

調査区の東部、Ⅰ－2グリッドに位置する土坑である。平面形は不整楕円形を呈し、規模は長軸1.34m、短軸1.02m、深さ60cmを測る。壁は下部が外方へ僅かに張り出し、袋状の断面形態をもつ。床面はほぼ平坦である。埋土は1層：黒褐色粘質シルト層、2層：黒褐色シルト質粘土層で、2層埋土中には多量の木片、木屑が含まれている。この2層からは木製品とともに陶磁器、土器などの遺物も多く出土している。

切り合い関係では土坑SK4に上面の一部を切られており、先行する。

出土遺物は磁器染付の中碗・小碗・碗蓋・小皿・猪口・瓶、青磁染付の猪口、磁器色絵の小杯、陶器の中碗・小碗・小杯・捏鉢・灯明受皿・擂鉢・蓋・茶入れ、陶器色絵の小碗、土師質土器小皿・鉢・ひょうそく・土人形、白土器小皿、瓦質土器焜炉又は火鉢、漆椀、その他木製品である。

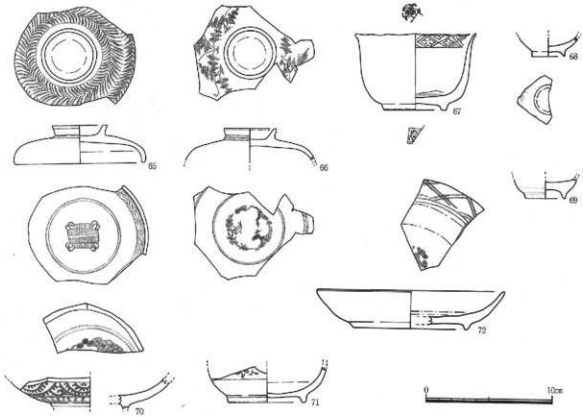


Fig.17　SK2出土遺物実測図 (1)

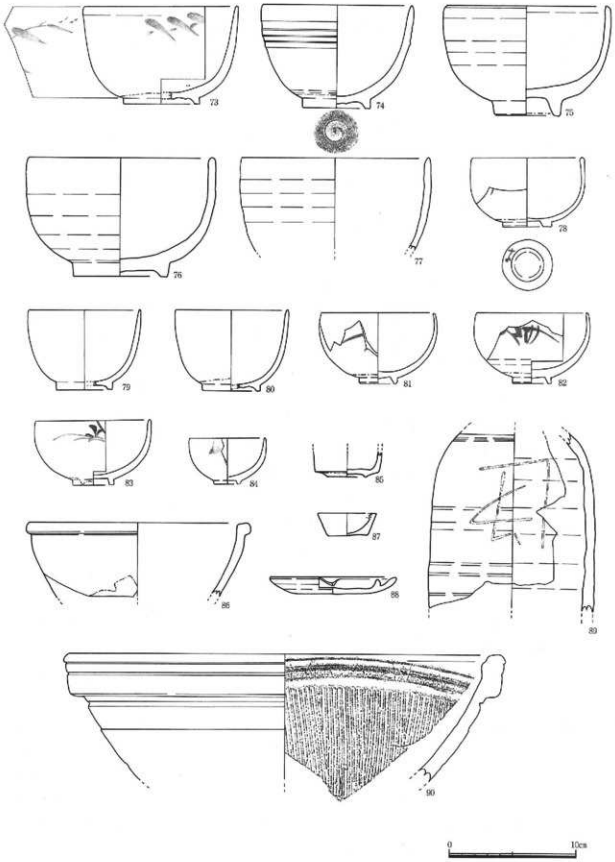


Fig.18　SK2出土遺物実測図 (2)

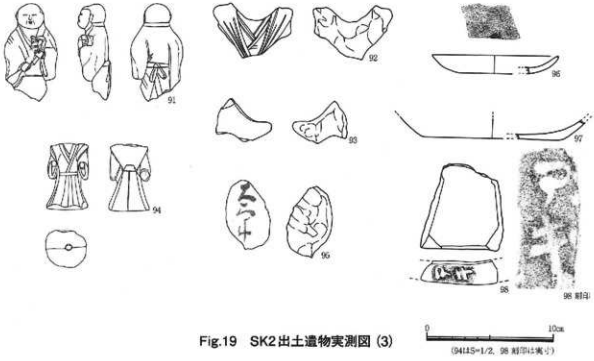


Fig.19　SK2出土遺物実測図 (3)

図示したものは、65～107である。

65～72は磁器。全て肥前産である。

65・66は蓋料碗の蓋で天井部が膨らみをもつ。65は外面に唐草文、内面に四方襷と糸巻を描く。肥前産で1770～1800年代の製品である。66は外面に草花文、内面には四方襷と松竹梅円形文を描くもので1770～1790年代。67は青磁染付の猪口で、高台内に二重角枠内渦福。見込みには筆描きによる五弁花を描く。68は色絵小杯で、赤の上絵付を施す。肥前産で18世紀前半のもの。70は大振りの碗で外面に蛸唐草、見込に松竹梅円形文を描く。72はくらわんか手の蛇の目釉剥ぎ小皿で、内面に格子文、見込みにコンニャク印判による五弁花を描く。71は染付瓶。呉須は暗緑灰色に発色する。

73～86・88～90は陶器。

75は肥前産の灰釉丸碗で高台施釉。73は尾戸窯の灰釉碗で、外面に鉄錆で草文を描く。体部外面にはごく緩やかなロクロ目。高台内を曲線的に削り出し、高台内には渦状の鉋痕を残す。釉は灰オリーブ色を帯びる透明の釉で1㎜前後の貫入が入る。内底に目痕をもつ。74も尾戸窯の灰釉碗で、外面上位にロクロ成形による幅広の凹線を4条巡らす。高台内を曲線的に削り出し、高台内に渦状の鉋痕を残す。釉は淡黄色を帯びる透明の釉で0.5㎜前後の貫入が入る。76・77は尾戸窯の灰釉碗か。ともに厚手の作りで、外面に緩やかなロクロ目が残る。76は高台内を曲線的に削り出すが、高台内は平坦に仕上げている。高台施釉。灰釉は浅黄色を帯びる透明の釉で2㎜前後の貫入が入る。79・80も尾戸窯の灰釉小碗である。同様に高台内を曲線的に削り出し、高台内に渦状の鉋痕が認められる。78・81～83は京都系の半球形灰釉小碗で、鉄絵を描く。78は蛇の目高台で、畳付に墨書が認められる。84は灰釉小杯で鉄絵は滲んでいる。

85は小瓶又は茶入れである。底部無釉で、鉄釉は黒褐色に発色している。86は捏鉢で暗赤灰色

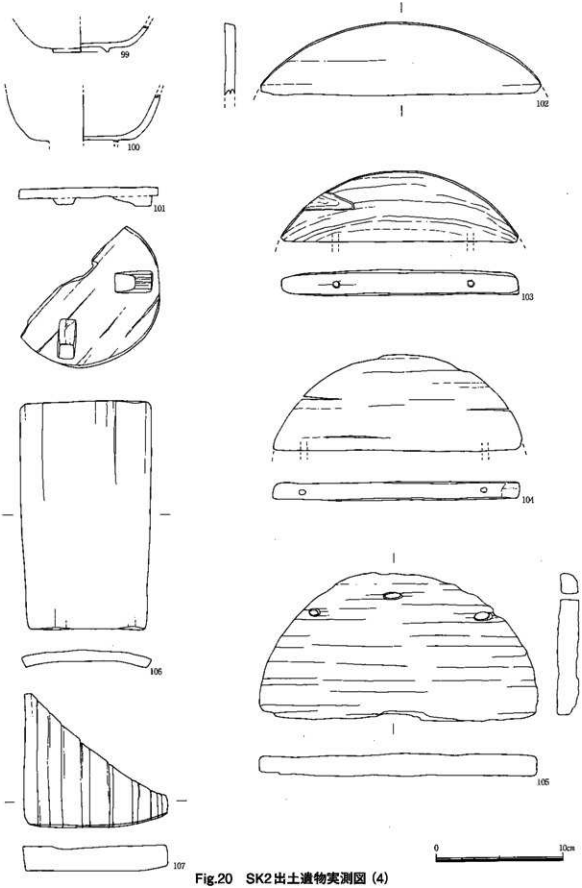


Fig.20　SK2出土遺物実測図 (4)

の鉄釉を施釉する。88は灯明受皿である。外底は回転ケズリ。鉄釉を全面に刷毛塗りする。89は瀬戸・美濃産の徳利。にぶい黄色を帯びる透明の釉を施釉する。内面に強いロクロ目。外面上位に釘彫りを認める。90は堺産の擂鉢である。

87・91～97は土師質土器。

87はひょうそくで、浅黄橙色の低火度釉を内面に施釉する。外面無釉。芯立は欠損している。91～95は土人形である。91・92・93・95は型作り前後貼り合わせによるもので、中空。94は型作り前後貼り合わせで、中実である。91は狛犬を抱く童子。胎土は灰白色を呈する。92は侍人形の一部か。94は侍で、底部に貫通しない径3㎜の穿孔を認める。外面にキラ粉が付着する。95は外底に墨書を認める。92～95は胎土がにぶい黄橙～灰黄色に発色する。96は尾戸窯の白土器小皿である。内面に型作りによる高砂文。内外面に横方向の静止ナデを施す。胎土は灰白色を呈する。97は大振りの土師質土器皿又は杯。内外面と外底に静止ナデを施す。胎土はにぶい褐色を呈する。外面に弱い煤が付着する。

98は平瓦。「アキ」銘を印刻するもので、安芸産（高知県安芸市）。二次被熱によって部分的に変色している。

99～107は木製品。

99・100は漆器椀である。99は漆椀の身又は蓋で、内外面は黒色。無文。器壁は薄く、高台内は曲線的に挽き出されている。100は内外面赤色。無文。器壁は厚い。101は漆器の曲物底部。内外面に漆を施し、内面は赤色、外面は黒色に発色する。外底に三足を貼付する。102は漆器で、曲物の底部又は蓋の一部とみられる。側面は欠損する。

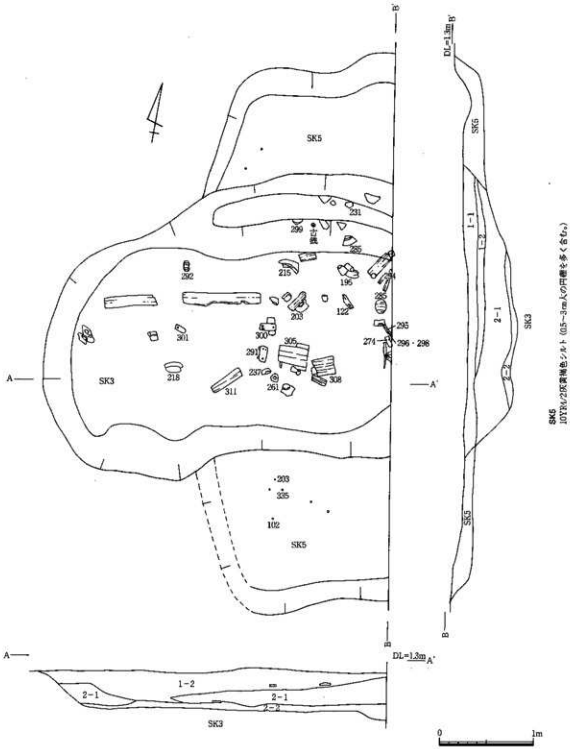
103・104は桶の底部。103は数枚の板を組み合わせて丸桶の底板をなしていたものの部材とみられ、半円状で内側面の2箇所に釘穴が残る。厚み1.7cm、底板の復元径は23.6cm。104も同様で、半円状を呈し、内側面の2箇所に釘穴が残る。厚み1.5cm、底板の復元径は22cmである。105は円形の桶の蓋か。厚さ1.7cm。片側面の周縁3箇所に貫通する円孔を穿つ。106は桶の側板。縦18.1cm厚さ0.7cmの薄板で、断面は緩やかに湾曲する。上部は幅10.5cm、下部は幅9.0cmと、上方に向かい僅かに広がる。内面の数箇所に縦方向の切り込みが入る。内面下部幅1.7cm高さ2.5cmの木片がはめ込まれる。107は用途不明の木片で、厚み2.0cmの板材を緩やかなカーブを描くように斜め方向に切り取っている。使用痕は認められない。

切り合い関係及び出土遺物の内容等からみて、SK2は18世紀末～19世紀初頭に比定される。

SK3 (Fig.21・22～36)

調査区の東部、I－3・J－3グリッドに位置する土坑である。平面形は不整形を呈し、規模は長軸確認長3.7m、短軸2.9m、深さ46cmを測る。断面形態は皿状で、壁は緩やかに立ち上がる。床面はほぼ平坦となる。埋土は1層：黒褐色粘質シルト、2層：黄灰色粘土と褐灰色粘土であり、埋土中には炭化物と木片、木屑が多く含まれている。また、中層から下層にかけて多量の木製品、木片、陶磁器、土器が出土している。

切り合い関係では、上面の一部を土坑SK5によって切られている。また、近接するSK4・SK5・SK6・SK7とは出土遺物の接合関係があり、SK3～7が同時期に機能したことが推察できる。



SK3
I－1層：10YR2/2黒褐色粘質シルト（1～2cm大の円礫を少量含む。炭化物・木片・木屑を少量含む。）
I－2層：10YR2/2黒褐色粘質シルト（1～2cm大の円礫を少量含む。炭化物・木片・木屑を多量含む。）
II－1層：2.5Y4/1黄灰色粘土（炭化物・木片・木屑を少量含む。）
II－2層：10YR4/1褐灰色粘土（木片・植物遺体を帯状に多量に含む。）

Fig.21　SK3・5平面図・セクション図

出土遺物は磁器染付大碗・中碗・小碗・小杯・小皿・中皿・猪口・蓋物・火入れ又は香炉、白磁中碗・小碗・小杯・鉢・猪口・碗蓋・紅皿、青磁中碗・小皿・中皿・猪口、陶胎染付碗、青磁染付猪口、色絵染付中碗、磁器色絵中碗・小碗・紅皿・蓋物・瓶・水滴、青花碗、青花小皿、陶器中碗・小碗・小杯・小皿・中皿・鉢・擂鉢・捏鉢・壺・蓋物・徳利・壺・甕・香炉・火入れ・灯明受皿・烏の水入れ・餌鉢・筆筒又は線香筒、陶器色絵中碗・小碗、土師質土器杯・小皿・人形・土錘・焙烙・焜炉、瓦質土器火鉢、瓦、煙管、鉄釘、古銭、銅製の毛抜き・簪、漆椀、曲物、下駄、不明木製品等である。

図示したものは108～314である。

108～172は磁器。115・138は中国産、123・146・150は肥前系、その他は肥前産である。

108～114・116～122・125・126・146・153・154は碗。108～113は染付丸碗。108～110は雨降り文に花弁を組み合わせたもので、高台内に「大明年製」銘をもつ。111・112はくらわんか手の染付丸碗で、外面に草花文を描く。113は外面に染付で雨降り文と丸文を描き、赤、緑の上絵付による紅葉を組み合わせる。口縁部口錆。1690～1730年代の製品である。114・119・120は陶胎染付碗で114は山水文、119・120は唐草文を描く。117・118は色絵磁器の碗である。117は赤と緑の上絵付による文様を描く。二次被熱により釉は変質する。肥前産18世紀の製品である。118は赤、緑、淡い青色の上絵付で草花文を描く。116は1660～1670年代にかけて、肥前でアジア輸出向けに生産された大振りの染付荒磯文碗である。内面に略化した荒磯文、外面に雲龍文を描く。121は色絵染付の浅半球形碗で、呉須と、赤、黄緑、その他の上絵付で山水文を描く。122・125・126は染付小碗。122は草花文、125は雨降り文、126は三方にコンニャク印判による若松文を描く。146は胴段形の白磁碗で、肥前系18世紀後半のものである。153は染付小碗。コンニャク印判で若松文を描く。肥前産1690～1730年代。154は染付小碗の底部で、高台内に「大明年製」銘をもつ。

124は白磁又は染付の碗蓋である。

127～137は小杯。127～131は染付小杯。127～129は海老を描くもので、肥前産18世紀。130は千鳥とと草を描き、18世紀前半～中葉のものである。131は竹文か。132・134は白磁または染付の浅丸形小杯である。133は色絵磁器の浅丸形小杯で、赤の上絵付を施す。18世紀後半。135は浅丸形の白磁小杯。136 は色絵小杯で、赤の上絵付を施し、18世紀のものである。137 は白磁または染付の小杯である。

138～142・144・145・155は皿。138は景徳鎮窯系の青花小皿である。内面に野菜文。高台内に放射状の鉋痕が残り、口縁端部の釉が部分的に剥げる。畳付には粗い砂が付着している。1620～1640年代の製品である。139・140は肥前産の染付端反形小皿である。139は外面に唐草文、内面に唐草とコンニャク印判による文様を施すもの、140は内外面に唐草文を描くものである。ともに1690～1710年代の製品である。141は糸切り細工による変形皿で、扁平な六角形。菱形の高台を貼付する。外面にコンニャク印判による唐草文、内面に型紙刷りによる草花文を施す。肥前有田の製品で、1690～1710年代のもの。142は変形形の皿または鉢で、口縁部稜花形。内外面にはコンニャク印判による桐文を配する。肥前産1690～1730年代。144・145は青磁の皿。144は内面に陽刻文様、145はヘラ彫りで芭蕉葉を描く。青磁釉はオリーブ灰色に発色する。ともに肥前有田の製品で17世紀後半のものである。155は白磁の手塩皿で、内面に陽刻による植物文様を描く。蛇の目高台で、高台

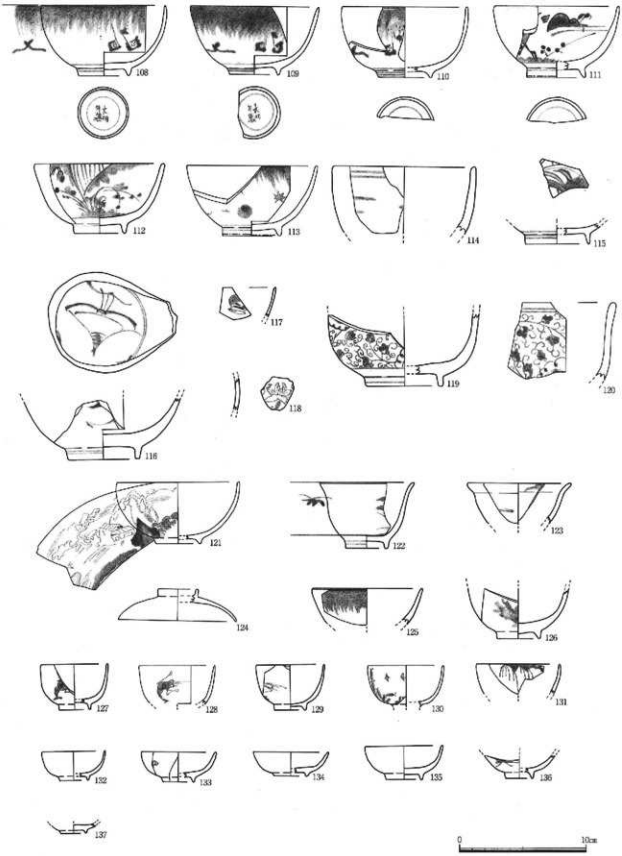


Fig.22　SK3出土遺物実測図 (1)

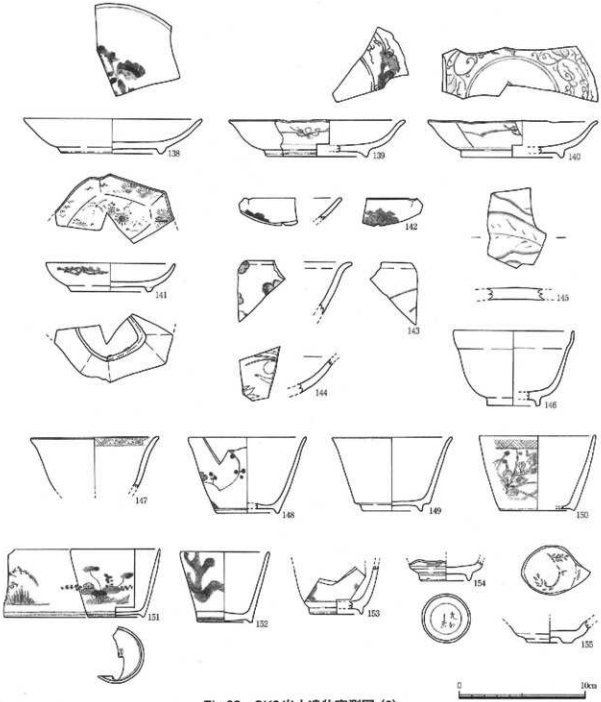


Fig.23　SK3出土遺物実測図 (2)

内は兜巾状を呈する。白磁釉は僅かに青色を帯び、二次被熱により変質している。肥前産で1630～1640年代の製品である。

115・123・143は鉢。115は景徳鎮窯系の青花小鉢で、内面に岩と草を描く。17世紀前半の製品である。123は肥前系の小鉢。143は端反形の染付鉢で、内面は花文か。17世紀後半～18世紀前半の製品である。

147～152は猪口。147は青磁染付の猪口。148は染付猪口で外面に草花文を描く。149は白磁の腰

折形猪口で、口縁部は口錆。肥前産で17世紀後半。150は肥前系の猪口で、外面に槍垣文と草花文を描く。呉須は淡い青色で滲む。18世紀後半のものである。151は外面に草花文。高台内渦福。152は二方にコンニャク印判による若松文を配する。肥前産で18世紀第2・3四半期のものである。

156は染付の蓋物蓋である。網目文と鳥を描く。18世紀前半。157は蓋物で、コンニャク印判による桐文と圏線を描く。1690～1730年代のもの。158は赤の上絵付で梅文を描く。SK6出土の350と同一個体とみられるもので、肥前産17世紀末～18世紀前半のものである。159は染付の香炉で松・梅を描く。肥前産で1640～1650年代のもの。160は瑠璃釉の蓋物身である。八角形を呈し、外面に陽刻による梅花文を施す。型押し成形で内面ナデ調整。高台は蛇の目高台となる。161は160の蓋。外面に陽刻による花・稲束を施し、瑠璃釉を施釉する。ともに肥前有田の製品で1680～1700年代のものである。163は白磁の手塩皿か。内面に陽刻文様を施す。二次被熱により釉は変質している。

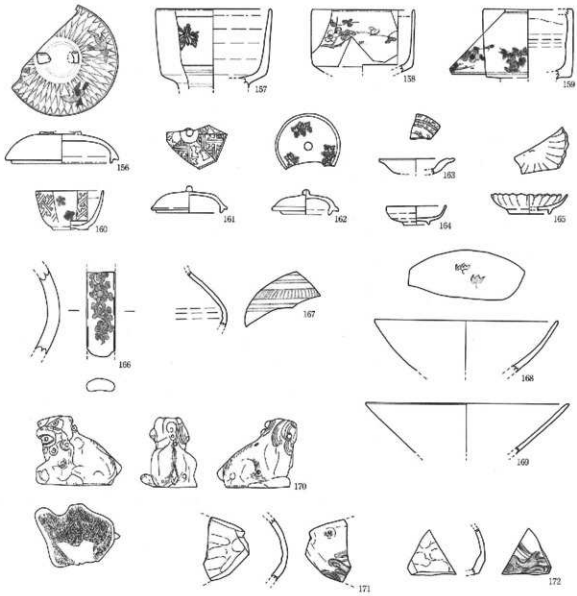


Fig.24　SK3出土遺物実測図（3）

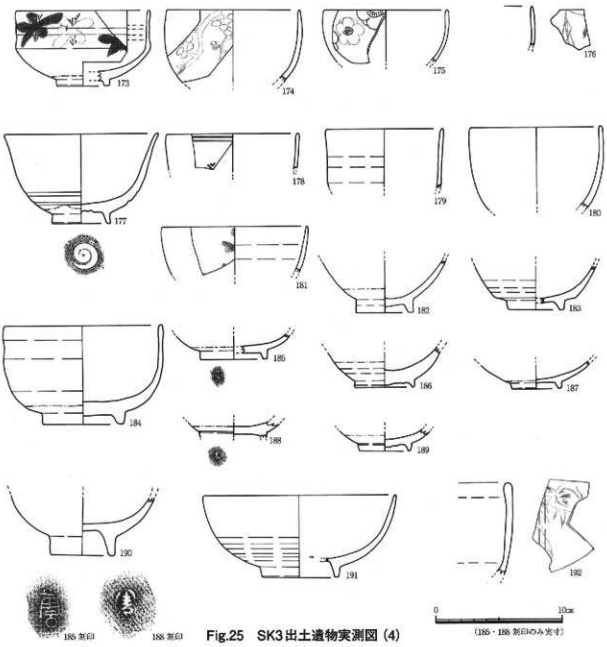


Fig.25　SK3出土遺物実測図 (4)

1630～1640年代のもの。164は白磁の紅猪口で、18世紀後半。165は白磁の紅皿又は小型の手塩皿。菊花形で、糸切り細工によるものである。

166は銚子の把手か。外面に花唐草文を描く。1690年代～18世紀前半のもの。167は色絵の髪油壺で、赤の上絵付で圏線と縞を施す。肥前産で1650～1670年代。168・169はうがい茶碗である。168は赤・金の上絵付で鳥文を描く。18世紀前半の製品である。169は文様の有無は不明で、漆継痕を認める。170は獅子の白磁水滴。型作り貼り合わせによるもので、内面ユビオサエ、ユビナデ。外底に布目痕が残る。背部分に径3～4㎜の円孔を穿つ。肥前産で17世紀末～18世紀第1四半期の製品である。171・172は魚と波を型取った水滴で、同一個体とみられる。171の魚の口の部分には円孔が穿たれている。型作り貼り合わせで、内面ユビオサエ、ユビナデ。波の部分を赤・青緑・黒の上絵付で描き分けている。肥前産で17世紀末～18世紀初頭のものである。

173～235は陶器。

173～190は碗である。173～177・187は京都系、188は京焼の灰釉碗である。173は腰折形の中碗。外面は鉄錆と白絵による花文を施し、花弁は白泥を盛上げるようにして描いている。174は色絵の半球形碗か。外面に上絵付による梅文を描くが、顔料は剥離しており不明である。175も半球形碗か。外面は鉄錆と呉須による梅文を描く。176は注連縄文碗で、縄を鉄錆、葉を呉須で描いている。177は京都系の灰釉碗である。外面下位に丸鉋による2条の凹線を巡らしている。高台内は鋭角的に削り出しており、高台内には渦状の鉋痕を残す。188は京焼の灰釉碗で、高台内に「清」銘印をもつ。灰オリーブ色を帯びる透明の釉で1～2㎜大の貫入が入る。185は肥前産の京焼風陶器。高台内を鋭角的に削り出しており、高台内に銘印をもつ。浅黄色を帯びる半透明の釉で1㎜前後の貫入が入る。178～181・189は尾戸窯の灰釉碗である。178は薄手の作りで、外面に白象嵌で二重圏線と印刻による山形文を施す。179は外面に緩やかなロクロ目が残り、灰白色を帯びる透明の釉を施す。181は鉄錆と呉須で草花文を描く。182・183は鉄釉碗。182は高台内を鋭角的に削り出す。高台無釉で釉は焼成不良気味で黒褐色に発色している。183は高台内を曲線的に削り出す。高台内に渦状の鉋痕。高台施釉。釉は焼成不良気味で灰褐色に発色。184は灰釉の腰張形碗で、外面に緩やかなロクロ目。外面下位に荒いケズリ痕が残る。畳付は丸くおさめる。高台無釉。灰オリーブ色を帯びる半透明の釉で2㎜前後の貫入が入る。186は灰釉碗の底部。外面下位に荒いケズリ痕が残る。高台内を曲線的に削り出す。高台内に渦状の鉋痕。高台無釉。灰黄色を帯びる半透明の釉を施釉している。190は肥前産の灰釉丸碗で、高台施釉。高台内を曲線的に深く削り出している。

191・192は鉢。191は尾戸窯の灰釉浅丸形鉢で、高台内を曲線的に削り出す。高台施釉。灰白色を帯びる半透明の釉で0.5～1㎜大の貫入が入る。内底に4足の目痕を認める。192は京都系の灰釉変形形鉢。外面には上絵付による草花文を描く。

193～203は皿。193・196・197・198は肥前産の唐津系灰釉陶器皿である。193と198は口縁部溝縁状。193・196・197は内底に砂目を伴う。ともに1610～1630年代のもの。194・195は肥前内野山窯の銅緑釉小皿である。見込み蛇の目釉剥ぎで、194は釉剥ぎ部分に砂が少量付着している。201・202は肥前産の京焼風陶器皿である。内面に鉄錆で山水文描く。202は高台内に墨書を認める。199は尾戸窯の灰釉小皿。見込み蛇の目釉剥ぎ。高台内を曲線的に削り出しており、高台内に渦状の鉋痕が残る。畳付の1箇所には三角形の切り込みをもつ。畳付外側にナデ。200は灰釉小皿。鉄錆で草花文を描く。203は灰釉中皿。口縁部は溝縁状を呈し、見込み蛇の目釉剥ぎ。灰釉は灰オリーブ色を帯びる透明の釉で2㎜前後の貫入が入る。

204～208は肥前産の捏鉢と片口で、白泥による刷毛目を施す。208は刷毛目二彩手の鉢で、内外面に白化粧土を刷毛塗りの後、外面上位に波状の櫛目を施している。畳付の外側を大きく面取っており、18世紀前半の製品にあたる。

209～212は備前焼の擂鉢である。

213・214は鉄釉甕。213は口縁部T字状で、外面上位に凹線を数条巡らす。鉄釉は暗赤褐色に発色する。214は口縁部T字状で、口縁端部の内側は無釉である。鉄釉は暗赤褐色に発色している。215は刷毛目を施した肥前産の甕である。口縁部T字状。外面に白泥を刷毛塗りの後、外面上位に

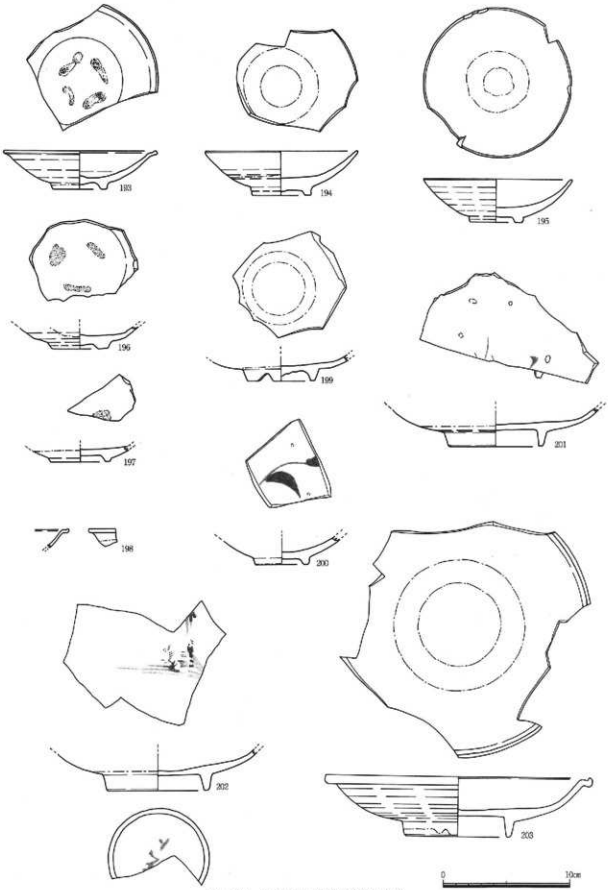


Fig.26　SK3出土遺物実測図 (5)

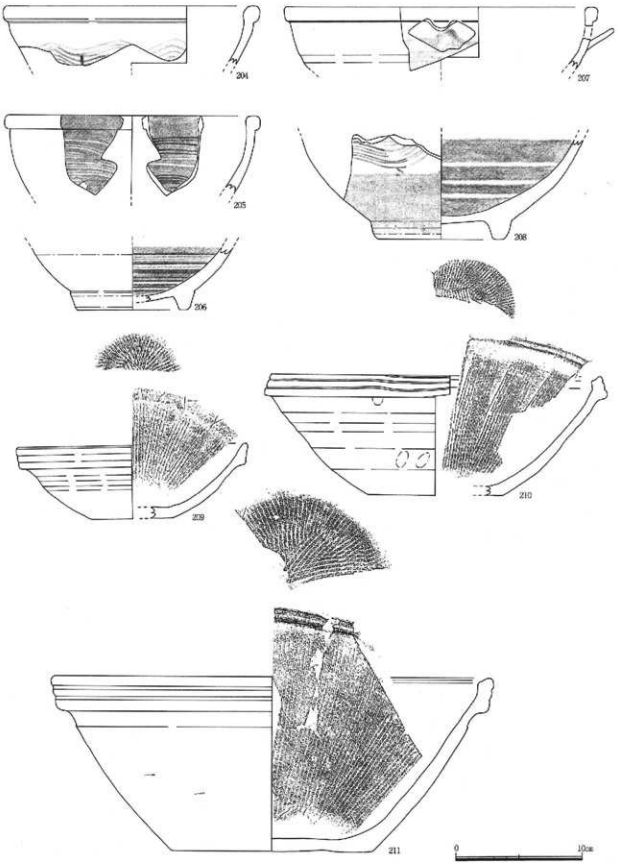


Fig.27　SK3出土遺物実測図 (6)

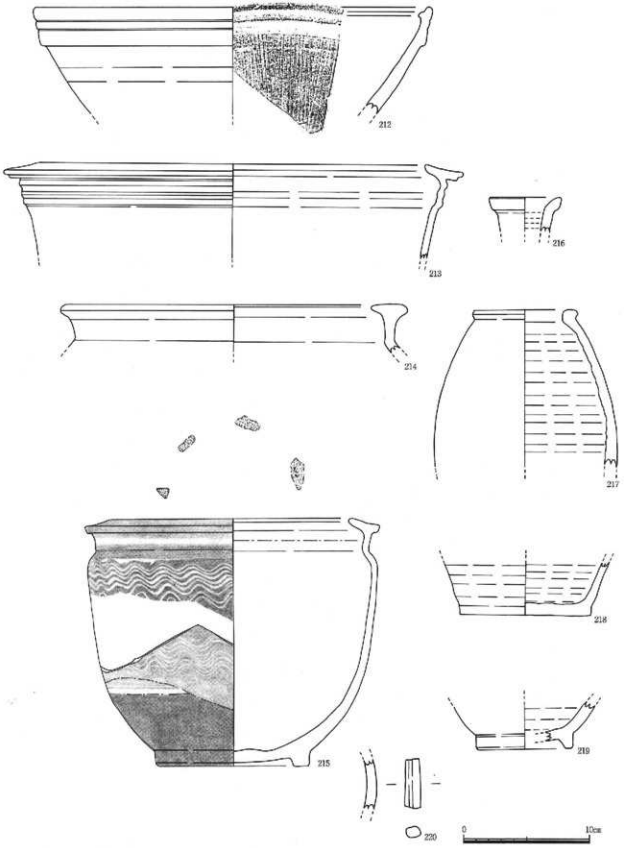


Fig.28　SK3出土遺物実測図 (7)

波状の櫛目を施し、オリーブ褐色の釉を重ね掛けする。外面下半鉄釉。内面は鉄釉を刷毛塗りする。内底には砂目を認める。17世紀後半の製品である。216は焼締の瓶。218は焼締の壺又は甕底部である。217は軟質施釉陶器の甕である。内面には橙色の低火度釉を施釉している。外面の釉は二次被熱によって変質し灰黄色に発色している。内面に強いロクロ目を残す。219は鉄釉の壺又は甕底部である。

220は灰釉の把手で尾戸焼の可能性をもつ。灰釉は灰黄色をおび0.5㎜前後の細かな貫入が入る。221は鉄釉の香炉である。内面と高台無釉で、釉は黒色に発色する。222は器種不明の体部片であるが、外面に鉄錆と呉須による柳文が描かれている。223は灰釉の筆筒で外面に鉄絵笹文を描く。224は灰落としか。灰釉を施釉し、鉄錆による草花文を描く。外底に銘書を認める。225は灰釉の餐水入れか。灰オリーブ色を帯びる半透明の釉を施釉し、外面に鉄絵を描く。226・227は灰釉の餌猪口である。228は灰釉蓋。天井部はケズリ後ナデ。灰釉は浅黄色を帯びる透明の釉で、1㎜前後の貫入が入る。

229～235は灯明受皿。229・230・233は油溝を持たないものである。229と233は内面のみに鉄錆を施すもので、内面と外面上位回転ナデ、外面下位に回転ケズリを施す。229は外底の中央に回転糸切り痕が残る。230は焼締で、内外面回転ナデ。外底は回転ケズリを施す。231・232・234・235は油溝を持つもの。231・232・235は全面に鉄錆を施すものである。231・235は外面下位と外底回転ケズリ。232も外面下位回転ケズリであるが、外底の中央には回転糸切り痕が残る。234は内面と外面上半に鉄錆を施すもの。外面下位と外底回転ケズリを施す。

236～260・262～265は土師質土器。261は瓦質土器である。

236～249は土師質土器小皿。236・239・246・247・249は口縁部内外面に灯芯油痕を残す。250は尾戸窯の白土器小皿である。内面には型による陽刻の鶴亀文を施す。内面周縁と外面にヨコナデ。外底には直線方向のナデを施す。

251・253は土鈴。251は巾着形の土鈴で、胎土は灰白色。型打ち成形の後、手捻りで巾着形に整形する。外面はナデ、ユビオサエ。中空で上面に紐孔、下面に溝状の切り込みをもつ。252は鳥形の人形で、外面上半に薄緑色の低火度釉を施釉している。型作り貼り合わせで中空。内面下位に粘土塊を貼付している。胎土は灰白色を呈する。

255は碗形の土師質土器で、内外面回転ナデ。胎土中には金雲母を含んでいる。口縁部に煤が付着している。

254・256・257は関西系の焙烙である。254は体部外面ユビオサエ、ヨコナデ、内面ヨコナデ。外底は凹凸をもつ。256・257は口縁部の双方に穿孔をもつ。体部外面ヨコナデ、内面ユビオサエ、ヨコナデ。外底にチヂレ目が残る。258・259は土製の焜炉。内外面回転ナデ。受けは欠損する。259は脚、窓を欠損する。外面ナデ、ミガキ、底部付近に横方向のイタナデを施す。内面ヨコナデ、接合部付近には連続したユビオサエが残る。260は土製の火鉢・焜炉類か。外面ヨコナデ。内面に横方向の強いイタナデとユビオサエを施す。261は瓦質の火鉢。脚部内側に径5㎜の貫通しない穿孔が穿たれる。262は土師質土器の焜炉。体部外面ナデ、内面ヨコナデ。

263～265は土錘である。

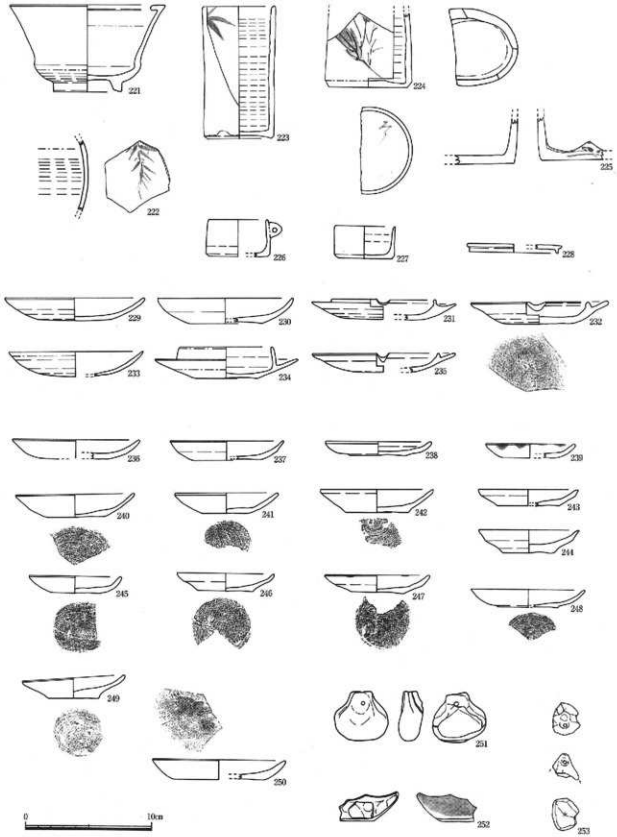


Fig.29　SK3出土遺物実測図 (8)

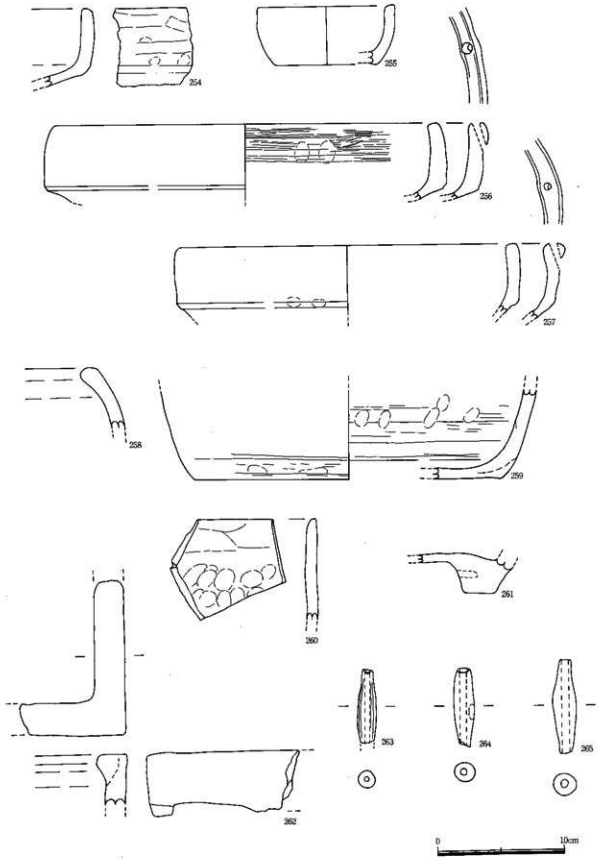


Fig.30　SK3出土遺物実測図 (9)

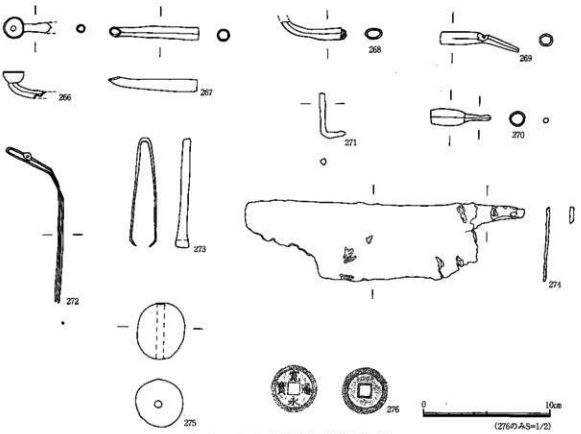


Fig.31　SK3出土遺物実測図（10）

266～268は煙管の雁首、269・270は吸口である。271は鉄釘で、断面四角形。272は銅製の簪で、飾り部分は欠損する。273は銅製の毛抜きである。274は鉄製の薬切り包丁で柄の部分を欠損する。275は球形の石製品で、貫通する穿孔を穿つ。白色系の石材を使用しており、外面は滑らかに調整している。276は寛永通宝である。

277～314は木製品。277～279・295・297・298は漆器である。

277～279は漆器椀と蓋である。277は漆椀蓋で、厚手の器壁をもつ。内面が赤色、外面が黒色で、つまみ内と外面に若松・笹・花・注連縄文の金蒔絵を施している。腐蝕が強く歪んでいる。278は277と揃いとみられる椀の身である。器壁が厚く、腰の張った底部から体部が上方へ立ち上がる。内外面黒色で、偶面に若松文と花文の金蒔絵が認められる。279は内面が赤色、外面が黒色で、外面には赤で植物状の文様が描かれている。底部の器壁は厚い。

295・297・298は漆器で、用途不明。295は不明木製品の側板か。板状で、中央付近に円弧状又は円形の抉りをもつ。内面又は外面の下位にも浅い切り込みを入れる。下側面は面取る。片側面と上部は欠損する。内外面と下側面に黒色の漆を施している。297は板状で、中央付近に円弧状の抉りをもつ。内面の中位と下位に浅い切り込みを入れ、下側面は面取る。漆を施す。左右側面と上部は欠損する。内外面と下側面に黒色の漆を施す。298は周縁を曲線的に形取る。片側面は欠損している。内外面に黒色の漆を施す。

280～284は箸。280は断面楕円形で、両先端を尖らせている。

285～287は曲物の底板か。何れも円形で、285は底板の径12.2cm、厚さ0.5cm。286は底板の径11.0cm、厚さ0.5cm。287は径11.8cm、厚さ0.5cmを測る。288は桶又は曲物の底板。復元径32cm、厚さ0.9cmを測る。289は桶の蓋。周縁に半円形の抉りを施す。復元径34cm、厚さ1.5cm。290は曲物の側板である。

291～293・299～301は下駄。291～293は連歯下駄で、歯の部分を削り出しによって作り出している。台部の平面形態は長方形。断面は箱形である。台部の寸法は、長さ21.0～21.5cm、幅9～10cm、厚さ1.3～1.5cmとほぼ共通している。何れも歯の接地面が使用によって著しく摩耗している。また293は目（鼻緒の差し込み穴）が使用によって手前方向に摩耗する。299～301は歯の部分が差歯になるもの。299は台部の平面形態は長方形。断面は横、縦方向とも箱形で、底面の周縁に面取りを施す。台部の寸法は、長さ19.5cm、幅8.5cm、厚さ2.8cmである。差歯で、歯差し込みための方形の穴を2穴（1歯につき1穴）穿つ。歯は欠損する。300は台部の平面形態は隅丸長方形。横断面は扁平な逆三角形。台部の寸法は、長さ22.8cm、幅8.7cm、厚さ3.0cmである。歯の差し込み穴は1歯につき3穴を穿つ。歯は接地面に向かって幅広がりとなる。301は台部の平面形態は小判形。横断面は扁平な逆三角形。台部の寸法は残存長13.9cm、幅7.3cm、厚さ3.0cmと小型である。歯は差し込みにより、1歯につき2穴の差し込み穴を穿つ。台部後方と歯を欠損する。

294は用途不明の木製品。板状で、厚み1.1cm。中央に円状の抉りをもつ。296は用途不明の木製品。扁平な棒状で、片側先端付近に浅い切り込みを設け、貫通する円孔を穿つ。一方の先端部は欠損する。302は用途不明の板材。抉りあり。使用痕は認められない。303は棒状の木製品で、断面形態は四角形。両面の中央に沿って、貫通しない釘穴が並んでいる。下面は斜めに切り取り、隅に面取りを施す。304は箆状の木製品。厚さ0.3cmの薄い板状で、両側の先端部は片側から斜め方向に面取る。

305は三方に側板をもつ浅い箱形の木製品で、前方は開く。底部には長方形の扁平な底板が釘で打ち付けられている。寸法は、長さ24.9cm、幅35.2cm、高さ6.5cm、底板の厚さは0.5cm、側板の厚さは2cmである。左手側の側板は前方に向けて僅かに低くなり、先端の角に面取りを施す。右手の側板は前方に四角形の切り込みが設けられ、先端の隅に面取りが施される。

306～314は不明木製品の部材。306は長方形。厚さ0.7cm。下位の数箇所に貫通する釘穴、側面に貫通しない釘穴を認める。一部に釘が残存する。上面の先端は内側へ斜めに面取る。307は長方形の板状で、厚さ0.9cm。下位の中央に貫通する穿孔をもつ。上端と下端は斜め方向に面取っている。308は台形の板状で、厚さ0.8cm。下位の数箇所と片側面隅に貫通する釘穴が残る。上部は斜め方向に切り取っている。309は長方形の板状。下隅に貫通する穿孔が残る。片側は欠損する。310は方形。板状。中央に貫通する穿孔あり。311は板状。中央の3箇所に穿孔が残る。先端部に鋸歯状の切り込みが入る。312は中央に沿って上位に1穴、2穴の貫通する穿孔が残る。下部先端は斜めに切り取る。313は上位に貫通する穿孔を穿つ。314も中央に沿って貫通する2穴の穿孔を認めている。

出土遺物の内容と周辺遺構との同時期性からみて、SK3は18世紀後半～末に比定される。

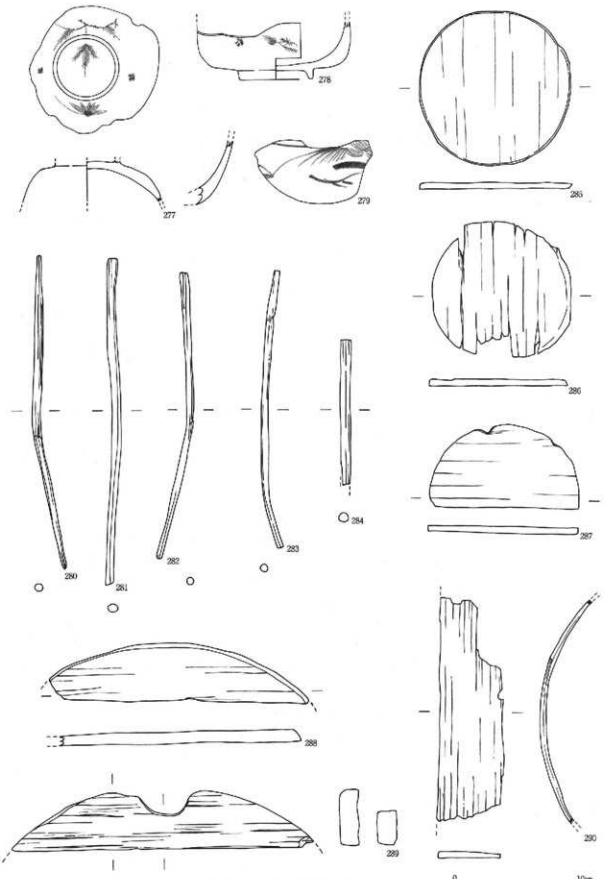


Fig.32　SK3出土遺物実測図（11）

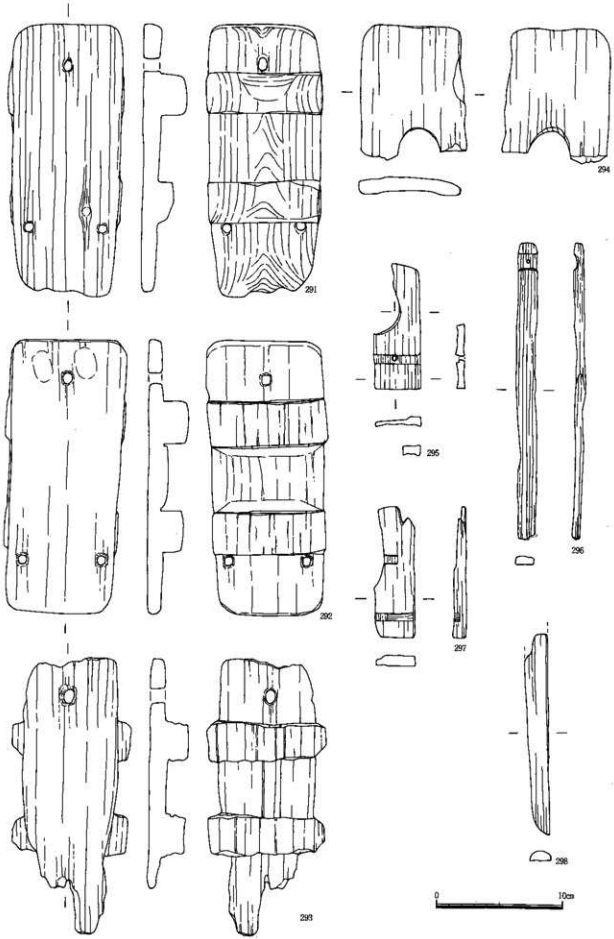


Fig.33　SK3出土遺物実測図 (12)

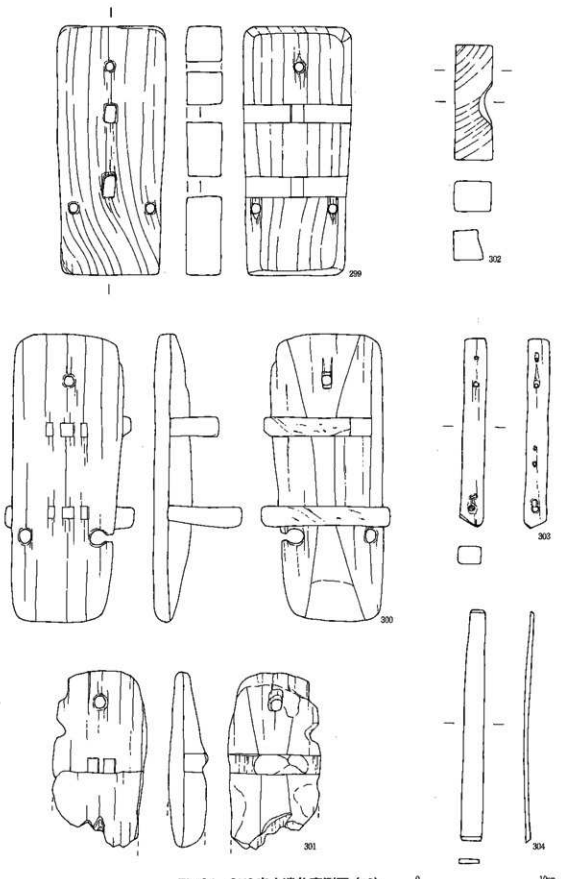


Fig.34　SK3出土遺物実測図 (13)

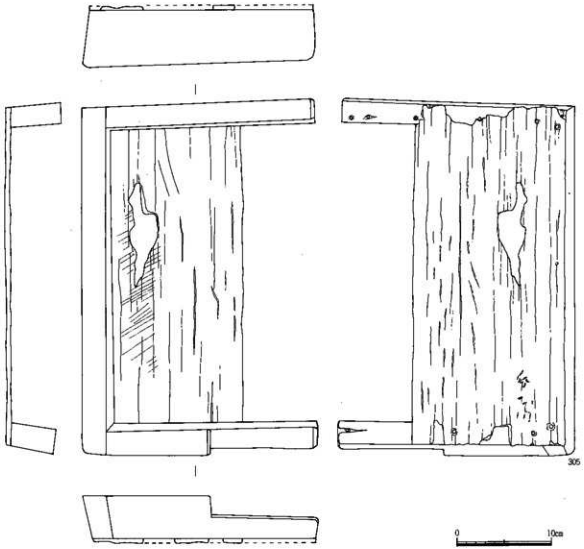


Fig.35　SK3出土遺物実測図（14）

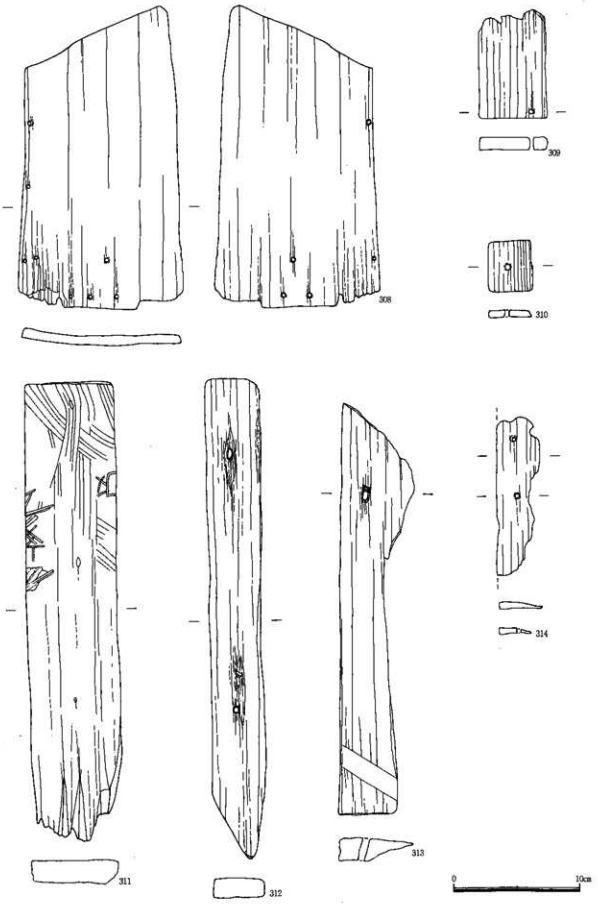


Fig.36　SK3出土遺物実測図 (15)

SK4 (Fig.37・38)

調査区の東部、I－1・2グリッドに位置する。平面形は不整形を呈し、検出規模は長軸3.86m、短軸1.98m、深さ18cmを測る。壁は外上方へ立ち上がり、床面は平坦である。埋土は灰黄褐色粘質シルトで、埋土中に炭化物を多く含んでいる。切り合い関係では土坑SK2を切っており、後続する。また、近接するSK3とは出土遺物の接合関係があり、両遺構が同時期に機能したことが推察できる。

出土遺物は磁器染付中碗・小碗・小杯・小皿・碗蓋・猪口・瓶、白磁小杯、青磁中碗、陶器中碗・小皿・捏鉢・擂鉢・火入れ又は香炉・線香筒又は筆筒、陶器色絵小碗、土師質土器小皿・燭台・人形、鉄釘、瓦片である。

図示したものは、315～330・332～334・336～338である。

315～325は磁器。何れも肥前産である。

315・316・318は染付碗。315は丸形の中碗で山水文を描く。316は雨降り文小碗。318は望料碗で、腰が張り、高台は外方に開く。外面に細線で宝文を描いている。18世紀後半の製品である。319は蓋物か。肥前産で17世紀後半のものである。

317は白磁小杯である。高台施釉で高台に砂が付着している。320は染付の桶形猪口で、丸に草花文を描く。321は望料碗の蓋で、天井部は膨らみをもつ。内外面に宝珠繋ぎと帯線を描く。五弁花文は手描きによる。1770～1800年代。322は火入れか。外面に松文を描き、内面下半は無釉である。323は染付小皿。口縁部輪花形で内面に松と垣、外面に花文を描く。18世紀中葉～末。324は染付瓶。325は髪油壺で草花文を描く。17世紀後半～18世紀初頭の製品である。

326～330・332・336は陶器。

326は瀬戸・美濃産の腰錆碗で、外面中位に回転削りによる4条の凹線を巡らす。外面下半に黒褐色の鉄釉、外面上半と内面に透明釉を施釉する。18世紀後半。327は外面に鉄錆による笹文を描く。外面下位に多段の荒い鬼板が残る。灰釉は灰オリーブ色を帯びる。328は灰釉の火入れ又は香炉で灰オリーブ色を帯びる透明の釉を施釉する。

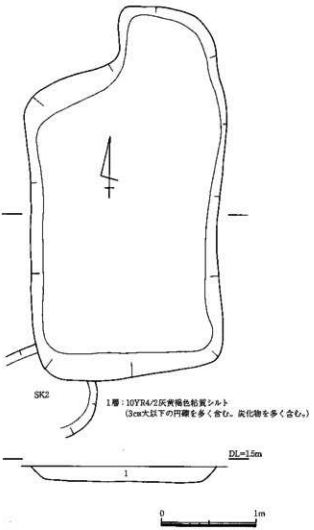


Fig.37　SK4平面図・セクション図

329は唐津系灰釉陶器小皿で、内面に砂目が残る。肥前産で1610～1630年代。330は肥前産の灰釉中碗。外面下位に放射状の施釉を残す。高台は曲線的に削り出し、高台内凸状。畳付外側には面取りを施す。高台施釉で、釉は焼成不良気味でにぶい黄色に発色する。332は灰釉の灰落としで、鉄錆で略化した植物文を描く。内面ロクロ目顕著で外底回転ケズリ。浅黄色を帯びる透明の釉を施釉する。京・信楽系。336は灯明受け皿。薄手の作りで、内面回転ナデ、外面回転ケズリ。内面に鉄釉を施釉し、外面は無釉である。釉は灰褐色に発色している。

333・334・337・338は土師質土器。

333・334はひょうそく。333は内面ににぶい黄橙色の低火度釉を施釉し、外面は無釉。灯芯受けを貼付し、中央に径4㎜の円孔を穿つ。内外面ナデ。337は土師質土器小皿である。338は人形で、動物の体の一部か。型作り貼り合わせで、中空。内面ユビナデ。底部に径3㎜の貫通しない穿孔を穿つ。外面にキラ雲母が付着している。胎土は浅黄橙色を呈する。

出土遺物の内容やSK3との同時期性からみて、SK4は18世紀後葉～19世紀初頭に比定される。

SK5 (Fig.21・38)

調査区の東部、I－2・3グリッドに位置する土坑で、東側の一部が調査区外となる。平面形は隅丸方形を呈し、検出規模は長軸5.74m、短軸確認長2.0m、深さ20cmを測る。壁は外上方に立ち上がり、床面は平坦である。埋土は灰黄褐色シルトである。切り合い関係では土坑SK3に切られている。また、SK3・SK7とは出土遺物の接合関係があり、これらの遺構と同時期に機能したことが推察できる。

出土遺物は近世陶磁器と土器、瓦片である。

図示したものは、染付小杯（331）、陶器擂鉢（335）である。331は桶形小杯で、外面に草文を描く。肥前産で18世紀中葉～後半の製品である。335は備前焼の擂鉢。内面は使用により著しく摩耗している。

出土遺物の内容やSK3・7との同時期性からみて、SK5は18世紀後半～末に比定される。

SK6 (Fig.39・40～42)

調査区の東部、G－3・H－3グリッドに位置する土坑で、東側部分が近代以降の攪乱を受けている。平面形は不整形を呈し、検出規模は長軸の残存長5.28m、短軸3.60m、深さ36cmを測る。断面形態は皿状で、壁は外上方へ立ち上がる。埋土は1層：褐灰色粘質シルト、2層・3層：灰黄褐色シルト質粘土で、下層には炭化物と近世の遺物が多く含まれている。

また、近接するSK3とは出土遺物の接合関係があり、両者が同時期に機能したことが推察できる。

出土遺物は磁器染付中碗・小碗・小杯・小皿・碗蓋・猪口・仏飯器・水滴・瓶、白磁小杯・合子、青磁香炉又は火入れ、磁器色絵蓋物、陶器中碗・小碗・小杯・小皿・中皿・鉢・擂鉢・土瓶・鍋・灯明受皿・火入れ又は香炉・壺、陶器色絵蓋物、土師質土器杯・小皿・白土器小皿・焜炉・焙烙・人形、煙管、石臼、瓦片である。

図示したものは、339～388である。

339～359は磁器。344が中国産、その他は肥前産である。

339・340は染付丸形碗である。340は草花文を描き、18世紀前半のもの。341は陶胎染付碗で、山

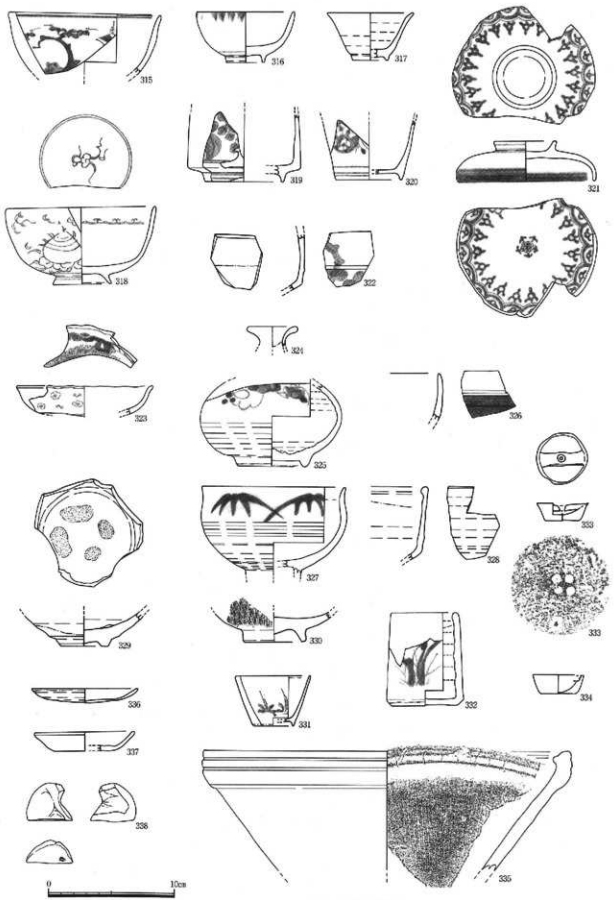


Fig.38　SK4・5出土遺物実測図

SK4（315～330・332～334・336～338），SK5（331・335）

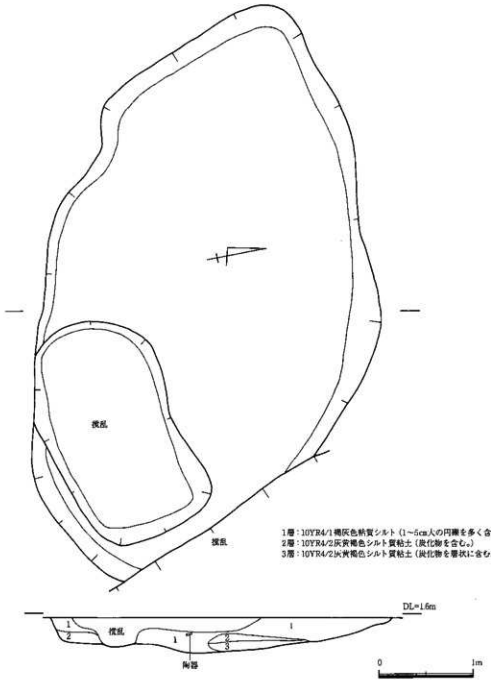


Fig.39　SK6平面図・セクション図

水文を描く。呉須は緑灰色に発色している。18世紀前半。342は白磁小碗で、肥前産17世紀後半。343は染付猪口である。345は初期伊万里の染付中皿で、口紅。内面に鳥、区画内に四方襷を描く。1640年代の製品である。346は白磁小杯。347は染付筒文小杯。348は菊花形の小杯又は小猪口で、348は口紅を施す。ともに二次被熱を受け、釉は変質している。肥前産で17世紀末～18世紀初頭のものである。349は肥前産の広東形碗蓋で、外面に梅花文を描く。1780～1820年代。350は色絵の蓋物蓋で、SK3出土の158と同一個体の可能性をもつ。赤の上絵付による梅文を施している。肥前産で17世紀末～18世紀前半のもの。351は仏飯器。353は白磁又は染付瓶の口縁部である。352は

染付草花文瓶で1660～1700年代。354は青磁の香炉である。内面無釉で、青磁釉は明緑灰色に発色する。355は白磁の合子で外面に菊弁を施す。内面施釉。肥前産で17世紀第4四半期の製品。356は色絵染付の水滴。外面は陽刻による菊花文。呉須と上絵付け（赤）で菊花を塗り分けている。上面中央に径4㎜の円孔を穿つ。肥前産17世紀後半。357は染付の水滴又は人形。型作り貼り合わせで、内面ユビオサエ、ナデ。358は白磁の水滴又は人形で、鳥を型取ったものか。肥前産17世紀後半。359は染付の水滴で、側面に径5㎜の円孔を穿つ。17世紀末～18世紀初頭の製品である。

344は景徳鎮窯系の青花皿で、内面に野菜文を描く。蛇の目高台。1620～1640年代の製品である。

360～374は陶器。

360・361は尾戸焼の灰釉中碗。361は灰白色を帯びる半透明の釉で0.5㎜前後の細かい貫入が入る。360・361はともに器面に御本が入る。362は京都系の灰釉碗である。外面には水仙文を描き、花弁を白泥、葉を鉄錆で描き分ける。灰釉は浅黄色を帯びる透明の釉である。18世紀前半の製品か。363は鉄釉碗。高台内に渦状の鉋痕を残す。高台施釉。鉄釉はにぶい赤褐色～黒色に発色する。

364は台付皿で、内面の釉を掛け分ける。釉は二次被熱により変質し、暗赤褐色と灰白色に発色する。高台内施釉。365は尾戸焼の灰釉小皿。内面には呉須で草文を描く。内外面に緩やかなロクロ目。内底に段をもつ。高台内は曲線的に削り出し、高台内は平坦である。366は肥前内野山窯の銅緑釉小皿で、見込み蛇の目釉剥ぎ。367は焼締めの小皿か。内底ロクロ目顕著。外底は回転糸切りである。

368は灰釉の変形形鉢。口縁部の数箇所をユビオサエし輪花形に形作る。内外面ロクロ目顕著。全面施釉で灰釉は薄く掛かり、にぶい黄褐色に発色。371は鉄釉鍋。鉄釉は暗赤褐色に発色する。372は瀬戸・美濃産の甕で、黄瀬戸釉を施釉する。肩部に双耳を貼付する。373は壺又は甕の底部で、灰釉を施釉し外面に鉄絵が施される。内面に強いロクロ目。外面下位に横方向のヘラナデ。外底施釉で、内底と外底周縁に胎土目痕が残る。374は鉄釉甕。型作りによる獣面を双方に貼付する。外面肩部に灰釉を流し掛けする。

375～380は土師質土器。

375は土師質土器杯。376・377は土師質土器小皿である。378は尾戸窯の白土器小皿で、内面に陽刻の寿字文を施す。器面は磨耗し調整不明である。胎土は灰白色を呈する。379は関西系の土師質土器焙烙。体部外面にヨコナデ、内面に横方向のイタナデ、内底にヨコナデを施す。外底には凹凸とチヂレ目が観察される。380は土師質土器の堤炉である。内外面ヨコナデ。内部突起は欠損する。

381は銅製の運管雁首又は吸口。382は鉄釘である。383～387は瓦。軒平瓦383は、中心飾り不明。側面に唐草文を配する。384は角枠内に「□源」（「布源」か）印銘をもつもので、布師田産（高知県高知市布師田）と推定される。386は「アキ兼」印銘をもつもので、安芸産（高知県安芸市）。385は角に「□忠」、387は「け□□」印銘をもつ。388は砂岩製の石臼で、上臼の部分にあたる。

出土遺物の内容及び、SK3との同時期性などからみて、SK6は18世紀末～19世紀初頭に比定される。

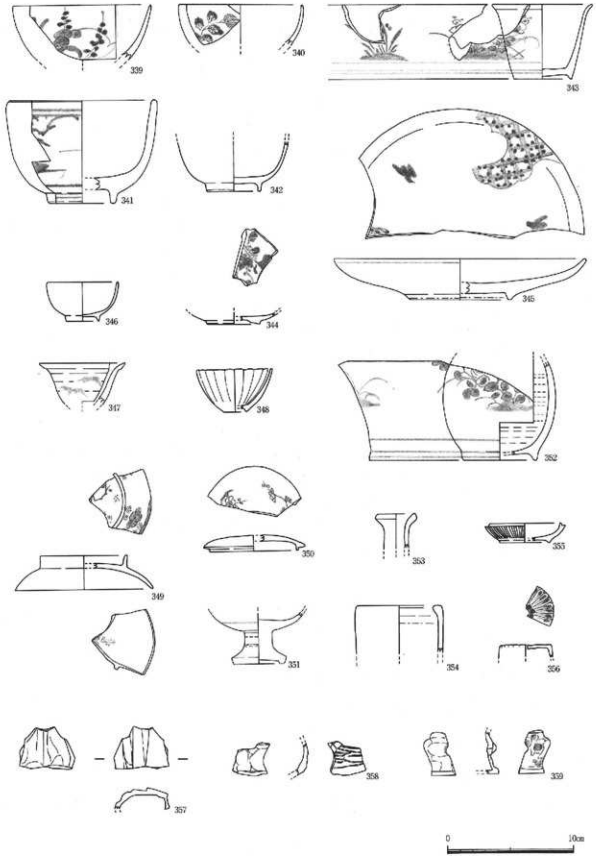


Fig.40　SK6出土遺物実測図 (1)

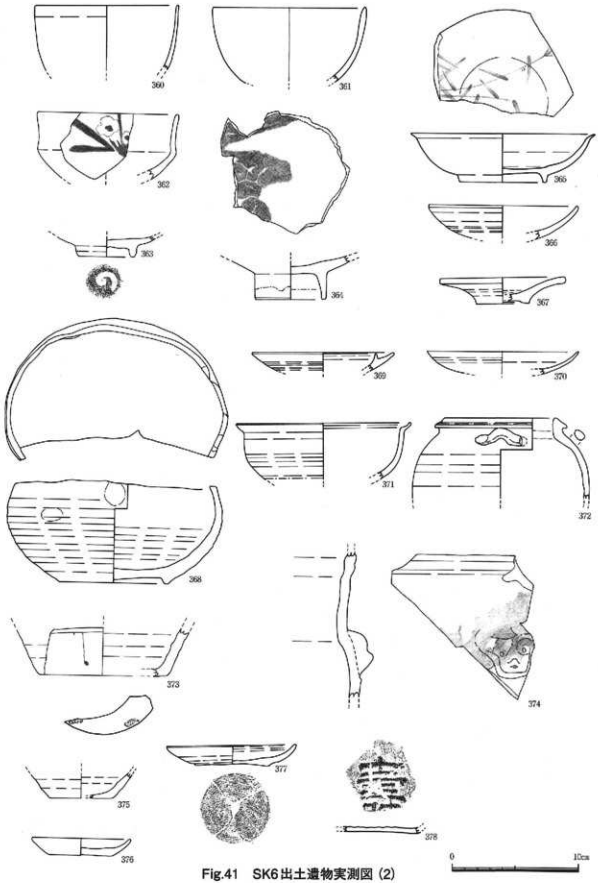


Fig.41　SK6出土遺物実測図 (2)

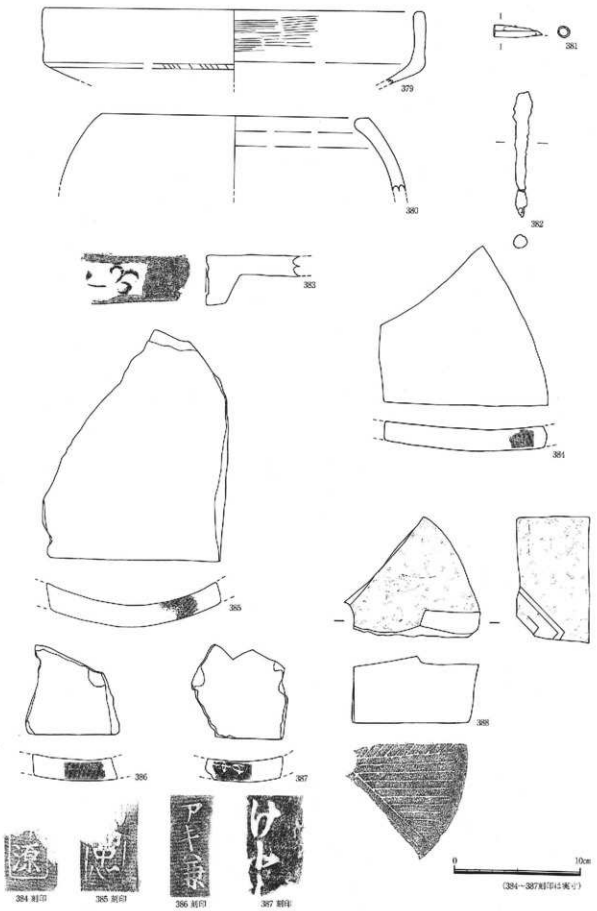


Fig.42　SK6出土遺物実測図 (3)

SK7 (Fig.43・44)

調査区の東部、G－1・H－1グリッドに位置する土坑で、東側の一部が近代以降の撹乱を受けている。平面形は不整円形を呈し、検出規模は長軸2.12m、短軸1.70m、深さ21cmを測る。床面は平坦で、壁は外上方へ緩やかに立ち上がる。埋土は1層：にぶい黄褐色粘質シルト、2層：灰黄褐色粘質シルトである。

また、近接するSK3・SK5とは出土遺物の接合関係があり、両者が同時期に機能したことが推察できる。

出土遺物は磁器染付中碗・碗蓋・合子、白磁紅皿、陶器中碗・小碗・小皿・鉢・灯明受皿・瓶、軟質施釉陶器甕、瓦片である。

図示したものは、389～400である。

389～394は磁器。何れも肥前産である。

389は染付広東形碗の雌。外面に梅、笹、「龍虎」の文字文、見込みに鷺文を描く。1780～1810年代の製品である。390は染付の丸形碗で外面に宝珠繋ぎと帯線、見込みに3足の目痕を伴う。391は染付の鉢か。擬状に開く幅広の高台をもつ。18世紀後半。392は染付小杯又は紅猪口。外面は笠文と蝙である。18世紀中葉～末。393・394は型押し成形による白磁紅皿で、18世紀後半のものである。

395～397は陶器。

395は灰釉の端反形小碗。灰白色を帯びる半透明の釉で2㎜前後の貫入が入る。高台内に墨書を認める。396は焼締めの灯明受皿。外面に回転ケズリを施す。397は口縁部輪花形の灰釉皿。厚手の作りで、外面にロクロ目。釉は二次被熱によって変質し灰白色を呈する。尾戸窯産の可能性をもつ。

398～400は瓦。398は軒平瓦で、中心飾りは篦文。両側に均整唐草文を配する。キラ粉を使用。399は側面に「王子」印銘をもち、徳王子（高知県香南市徳王子）産と推定される。400は「アキ」印銘をもつもので安芸（高知県安芸市）の製品である。

出土遺物の内容及び、SK3・SK5との同時期性などからみて、SK7は18世紀末～19世紀初頭に比定される。

SK8 (Fig.45)

調査区の東部、G－2グリッドに位置する土坑で、東側の一部が近代以降の撹乱を受けている。平面形は不整円形を呈し、検出規模は長軸1.20m、短軸0.92m、深さ12cmである。断面形態は皿形で壁は外上方へ緩やかに立ち上がる。埋土は1層：

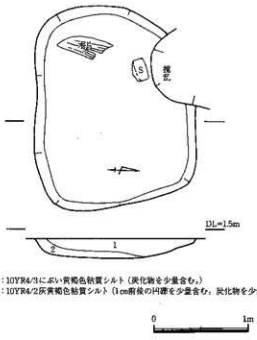


Fig.43　SK7平面図・セクション図

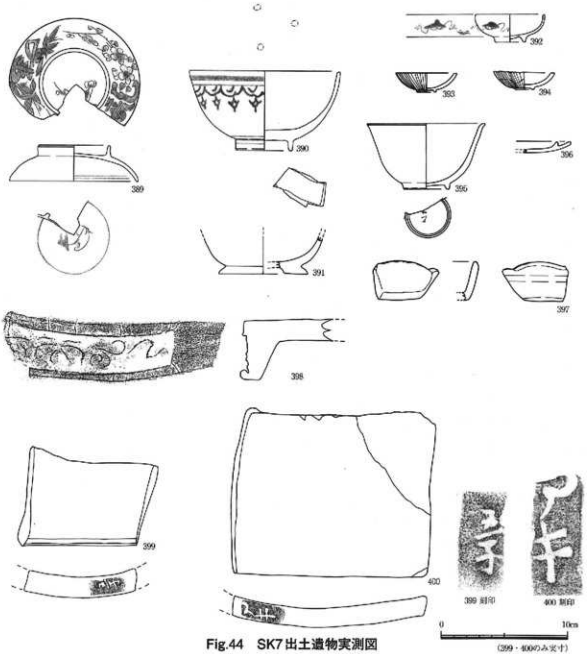


Fig.44　SK7出土遺物実測図

にぶい黄褐色粘質シルト、2層：灰黄褐色粘質シルトである。

出土遺物は磁器染付中碗・蓋物、白磁紅皿、陶器合子である。

図示したものは、401～404である。

401・403・404は磁器。401は染付蓋物。外面に草花文と蝶。口縁端部無釉で露胎部は橙色に発色している。肥前産で18世紀前半のもの。403は型押し成形の合子。外面に陽刻による紗綾形文を施し、高台は蛇の日状となる。内面施釉で内面上位が無釉である。肥前産で17世紀末の製品である。404は白磁紅皿で18世紀後半。型押し成形で外面下半は無釉である。

402は陶器で、灰釉の合子である。外底回転ケズリ。内面施釉。かえりと外底無釉。灰釉は灰黄色を帯びる半透明の釉で1㎜前後の貫入が入る。

SK8は18世紀後半に比定される。

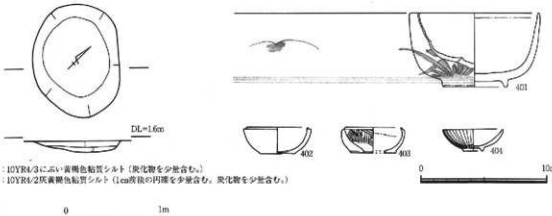


Fig.45　SK8平面図・セクション図・出土遺物実測図

SK9（Fig.46・47）

調査区の東部、G－2・H－2グリッドに位置する土坑で、東側部分が近代以降の撹乱によって削平される。検出規模は長軸残存長2.38m、短軸1.36m、深さ20cmを測る。断面形態は逆台形で、床面は平坦である。埋土は1層：にぶい黄褐色粘質シルト、2層：黒褐色シルト質粘土である。

出土遺物は磁器染付中碗・小碗・小杯・小皿・猪口・碗蓋・瓶、青磁染付猪口、磁器色絵中碗、陶器中碗・小碗・小皿・中皿・擂鉢・捏鉢・灯明受皿・火入れ又は香炉・土瓶・瓶、陶器色絵小碗、土師質土器小皿・白土器小皿、鉄釘、瓦片である。

図示したものは、405～427である。

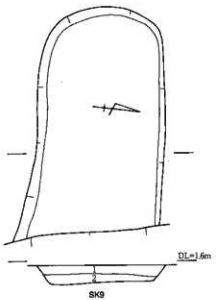
405～414は磁器で、411は肥前系、その他は肥前産である。

405は染付広東形碗の蓋で外面に鳥文を描く。406は描いとみられる広東形碗である。407は染付の丸形小碗で、コンニャク印判による丸文を施す。18世紀前半のものである。409は青磁染付碗の底部。高台内に「筒エ」銘をもつもので、肥前筒江窯の製品である。見込みには筆描きによる五弁花を描く。18世紀後半。410は猪口。外面に竹と梅を描く。呉須は暗緑灰色を呈する。411は肥前系の丸碗形蓋物で、外面に竹、梅を描く。焼継ぎ痕が残る。18世紀末～19世紀前半のものである。412は桶形の小杯で、梅文と稲束を描く。18世紀後半～19世紀初頭。413は染付小瓶。414は初期伊万里の壺の底部で、高台外面に櫛歯文、高台内には人物とみられる文様を施す。畳付に灰白色の粗い砂が付着している。1630～1640年代。408は色絵中碗である。赤、黄、その他の上絵付で草花文を描いている。肥前産17世紀後半の製品である。

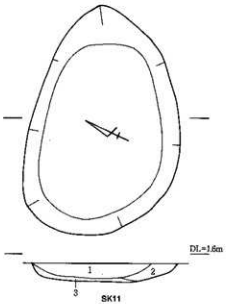
415～425は陶器。

415～418は碗。415は関西系の灰釉半筒形碗。灰白色を帯びる透明の釉で1～2㎜大の貫入が入る。416は信楽産の端反形小碗で19世紀。口縁部内外面に緑釉、体部に灰釉を掛け分ける。灰釉は1㎜前後の貫入が入る。417は京都系の色絵小碗。薄緑の上絵付で松文を描く。灰釉は灰白色を帯びる。418は肥前系の灰釉中碗で、高台内を鋭角的に深く削り出す。高台内は平坦。畳付外側に面取りを施す。灰釉は浅黄色を帯びる。

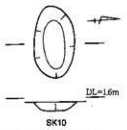
419は瀬戸・美濃産の稜花皿。灰釉を施釉し、内面に呉須絵を施す。高台施釉。420は京都系の色絵平碗。赤、薄緑、その他の上絵付で菊文を描く。421は尾戸窯の灰釉小皿。口縁部端反形で、体



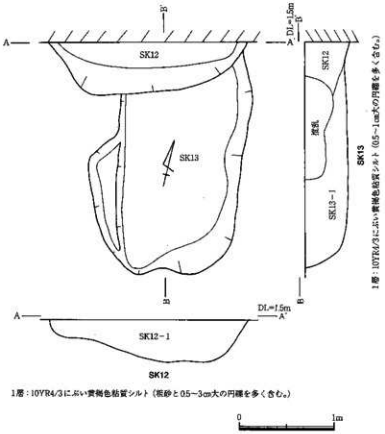
1層：10YR4/3にぶい黄褐色粘質シルト（1cm大の円礫を少量含む。炭化物を少量含む。）
2層：10YR3/2黒褐色シルト質粘土（1～4cm大の円礫を含む。炭化物を少量含む。）



1層：10YR4/3にぶい黄褐色粘質シルト（3～4cm大の円礫を含む。炭化物を含む。）
2層：10YR4/3にぶい黄褐色粘質シルト（礫を多く含む。炭化物を含む。）
3層：10YR4/2灰黄褐色粘質シルト　（炭化物を少量含む。）



1層：10YR4/2灰黄褐色粘質シルト
（4cm大以下の円礫を多く含む。炭化物を含む。）



1層：10YR4/3にぶい黄褐色粘質シルト（粗砂と0.5～3cm大の円礫を多く含む。）

Fig.46　SK9～13平面図・セクション図

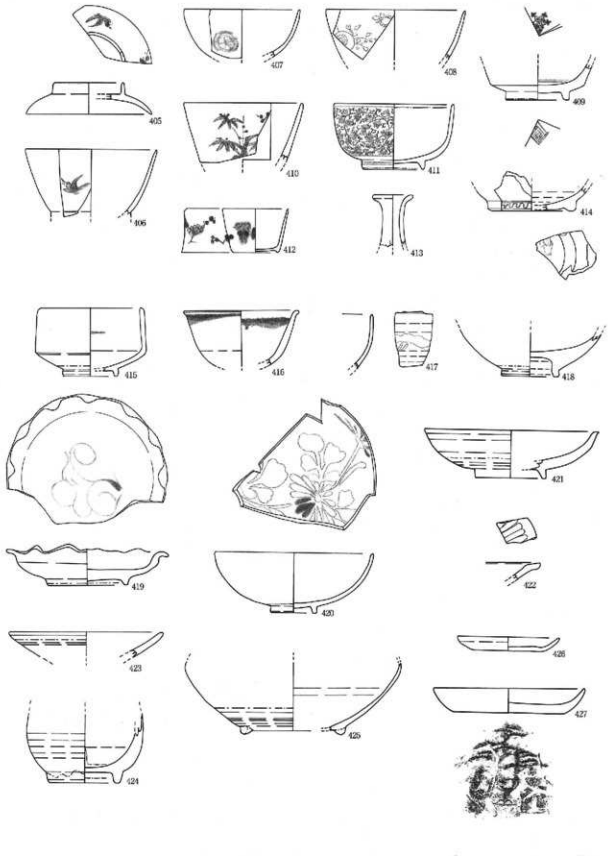


Fig.47　SK9出土遺物実測図

部は厚手である。外面にロクロ目。外面下半無釉。灰釉は焼成不良気味で白濁している。422は瀬戸の灰釉折縁皿。内面にそぎを施し、オリーブ黄色を帯びる光沢の強い透明の灰釉を施釉する。大窯3期後～4期の製品で、16世紀末～17世紀初頭頃のものである。423は灰釉の灯明受皿で、内面に櫛目が入る。灰白色を帯びる半透明の釉を内面に施釉する。424は鉄釉の瓶。高台施釉で、鉄釉は黒色に発色する。425は灰釉土瓶の底部で、三足を貼付する。

426は土師質土器小皿。427は尾戸窯の白土器小皿。灰白色の胎土をもち、内面に陽刻による高砂文を施す。内面周縁と外面にヨコナデ、外底に不定方向のナデを施す。

SK9では17世紀から19世紀までの製品が出土しているが、1820年代以降みられる肥前産の端反形碗や能茶山窯産陶磁器は確認できていない。遺物内容と周辺遺構との関係等からみてSK9は18世紀末～19世紀初頭に比定される。

SK10 (Fig.46・48)

調査区の東部、F－2グリッドに位置する土坑である。平面形は楕円形を呈し、検出規模は長軸0.78m、短軸0.42m、深さ10cmを測る。断面形態は皿状で、壁は外上方に立ち上がる。埋土は灰黄褐色粘質シルトである。

出土遺物は磁器染付小杯、陶器細片、土師質土器小皿である。このうち、土師質土器小皿（433）は埋土上層からほぼ完形の状態で出土したものである。

図示したものは、土師質土器小皿（433）、磁器染付小杯（434）である。434は肥前産の桶形小杯で竹文を描く。

SK10は18世紀に比定される。

Fig.48　SK10・11出土遺物実測図
SK10（433・434），SK11（428～432・435）

SK11 (Fig.46・48)

調査区の東部、F－2グリッドに位置する土坑である。平面形は楕円形で、検出規模は長軸2.42m、短軸1.60m、深さ20cmを測る。断面形態は皿状で、壁は外上方へ緩やかに立ち上がっている。埋土は1層・2層：にぶい黄褐色粘質シルト、3層：灰黄褐色粘質シルトである。

出土遺物は白磁中碗、色絵磁器小碗、陶器中碗・小皿、土師質土器人形、瓦質土器火鉢、鉄釘、瓦片である。

図示したものは、428～432・435である。

430は色絵磁器の碗蓋。赤、緑、その他（剥離し不明）の上絵付けで草花文を描いている。肥前産で17世紀後半のものである。428・429は陶器。428は肥前内野山窯の銅緑釉小皿である。見込み蛇の目釉剥ぎで、釉剥ぎ部分と畳付に楕円形の砂目痕を残す。17世紀後半。429は肥前産の灰釉丸碗。高台施釉で、淡黄色を帯びる半透明の釉。内底は凸状に盛り上がる。17世紀後半～18世紀前半。

431は鉄釘。432は瓦質土器の火鉢である。口縁部は内方へ肥厚させる。435は土師質土器の人形で、馬と童子。胎土は浅黄橙色を呈する。型押し成形貼り合わせによるもので、中実である。底部には貫通しない穿孔を穿つ。人物の頭部は欠損する。

SK11は18世紀に比定される。

SK12 (Fig.46・49)

調査区西部、D－2グリッドに位置する土坑である。北側の大部分が調査区外に出ているため、全体の規模、形態は不明であるが、東西長2.1m、南北長0.52mまでを確認している。深さは46cmを測る。埋土はにぶい黄褐色粘質シルトである。切り合い関係では土坑SK13を切っており、後続する。

出土遺物は磁器染付皿、陶器擂鉢・甕・灰釉陶器細片、白磁小杯、陶器中碗・甕・急須、鉄釘、瓦片である。

図示したものは436～441である。

436・438は磁器。436は胴絞形の白磁小杯。外面中位に凸状の線が巡る。胎土は白色で透明感をもち、関西系の製品とみられる。438は染付の皿又は鉢。外底に「富貴長春」銘の一部が見える。肥前産で18世紀のものである。

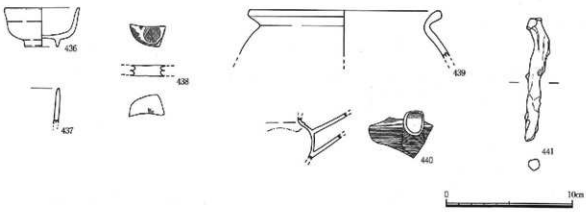


Fig.49　SK12出土遺物実測図

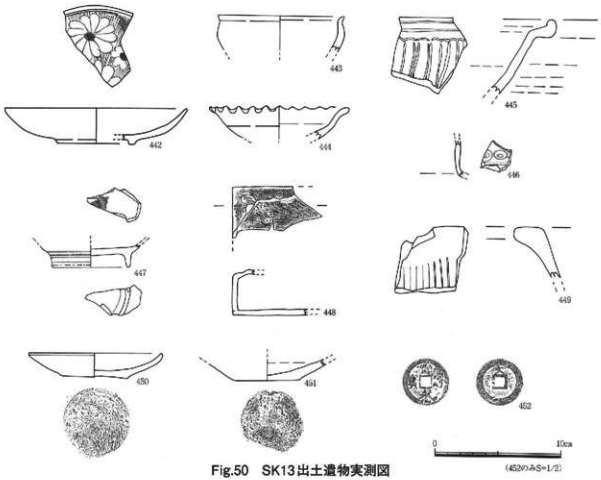


Fig.50　SK13出土遺物実測図

437・439・440は陶器。437は尾戸窯の灰釉中碗。外面に緩やかなロクロ目。灰釉は灰白色を帯びる半透明の釉で1㎜前後の貫入が入る。439は鉄釉瓶。鉄釉は黒褐色に発色する。胎土は黄灰色を呈する。440は灰釉の急須。薄手の作りで、外面には横方向の櫛目を巡らし、把手を貼付する。灰釉は灰オリーブ色から灰白色に発色している。

441は鉄釘である。

遺物量が少なく年代観は明確にできないが、急須の出土等からみてSK12は18世紀末から19世紀に比定される。

SK13（Fig.46・50）

調査区の西部、D－2グリッドに位置する土坑で、土坑SK12に切られている。平面形態は不整形で、検出規模は南北確認長1.96m、東西長1.34m、深さ44㎝を測る。断面形態は逆台形で、床面は平坦である。埋土はにぶい黄褐色粘質シルトである。

出土遺物は磁器染付中碗・小碗・小皿・水滴・瓶、白磁小杯、陶器中碗・小碗・小皿・鉢・捏鉢・火入れ・瓶、土師質土器小皿・焜炉、鉄釘である。

図示したものは442～452である。

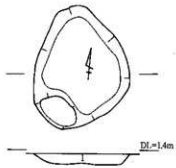
442・446～448は肥前産の磁器である。442は初期伊万里の小皿で1610～1630年代のもの。内面は菊花重ね文で、菊花は花芯に濃みを施している。透明釉は僅かに青色を帯びており、高台には灰

白色の粗い砂が付着している。釉は二次被熱により変質する。446は初期伊万里の壺。頸部外面に二重圏線と渦文を巡らす。内面無釉。呉須は青灰色に発色している。肥前産1630～1640年代。447は染付鉢の底部か。448は水滴。型押し成形で、底部貼り合わせ。上面に型による陽刻文様を施す。内面にユビナデ、内底に布目とハケ目が残る。外底施釉で、内面と外面の一側面が無釉となる。

443～445は陶器。443は瀬戸・美濃産の鉄釉天目形碗で、鉄釉は黒色～黒褐色に発色している。444は瀬戸・美濃産の灰釉稜花皿。灰釉はオリーブ黄色を帯びる透明の釉である。445は刷毛目二彩手の皿又は鉢。黒褐色の素地に白泥で刷毛状の文様を描き、灰釉を施釉している。口縁部は折縁形を呈する。外面下半無釉。灰釉はオリーブ褐色に発色している。肥前産で17世紀後半～18世紀前半のものである。

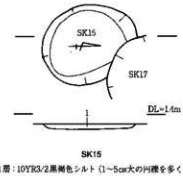
449～451は土師質土器。449は関西系の堀炉。外面ナデ、内面ヨコナデ調整。内面の一部に縦方向の擦目を認める。内部突起は欠損する。胎土はにぶい黄橙色で、胎土中には石英、長石、灰黒色の鉱物の粗砂、金雲母、赤色風化礫等の砂粒を含んでいる。450は土師質土器小皿。451は杯又は皿の底部である。ともに外底回転糸切り。452は寛永通宝である。

図示したものの他、SK13では、肥前内野山窯銅緑釉小皿、肥前産染付碗底部、肥前産灰釉丸碗等が出土している。



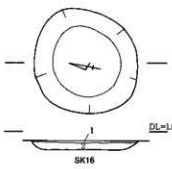
SK14

1層：10YR4/3にぶい黄褐色粘質シルト（1～10cm大の円礫を含む。炭化物を少量含む。）



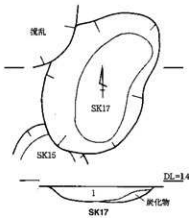
SK15

1層：10YR3/2黒褐色シルト（1～5cm大の円礫を多く含む。）



SK16

1層：10YR3/2黒褐色シルト（1～5cm大の円礫を多く含む。）
2層：10YR3/2黒褐色粘質シルト（1～5cm大の円礫を多く含む。炭化物を含む。）



1層：10YR4/2灰黄褐色粘質シルト（1～3cm大、5～6cm大の円礫を含む。炭化物を多く含む。）

0 1m

Fig.51 SK14～17平面図・セクション図

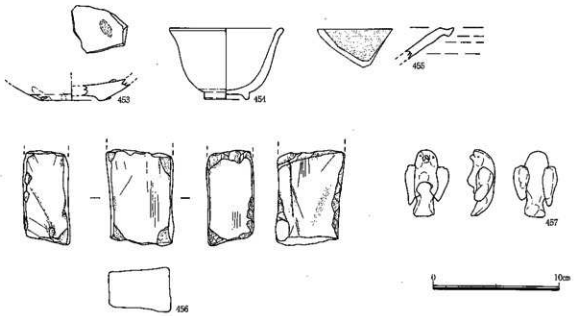


Fig.52　SK14・15出土遺物実測図
SK14（453・456）、SK15（454・455・457）

SK14 (Fig.51・52)

調査区の西部、C－3グリッドに位置する土坑である。平面形は不整形を呈し、検出規模は長軸1.30m、短軸1.00m、深さ10cmを測る。断面形態は皿状で、壁は緩やかに立ち上がり、床面は平坦である。埋土はにぶい黄褐色粘質シルトである。

出土遺物は磁器染付中碗・皿、陶器碗・小皿・擂鉢、土師質土器杯、硯、鉄釘であり、この中には唐津系灰釉陶器小皿、肥前内野山窯銅緑釉小皿や肥前産染付丸碗など、17世紀から18世紀にかけての遺物が含まれている。

図示したものは453・456である。

453は唐津系灰釉陶器の小皿で、内底に胎土目痕が残る。外面にロクロ目。外面下半無釉で、灰釉は灰色を帯びる。肥前産1590～1610年代。456は凝灰岩製の砥石。箱形で、中央部から破損している。主研面、裏面、両側面とも擦痕が残り、主研面は使用によって弓なりに摩耗する。

SK15 (Fig.51・52)

調査区の西部、B－3グリッドに位置する土坑である。平面形は楕円形を呈し、検出規模は長軸1.02m、短軸0.80m、深さ8cmを測る。断面形態は皿状、埋土は黒褐色シルトである。切り合い関係ではSK17によって切られ、後続する。また、西側に近接するSK16とは出土遺物の接合関係があり、同時期に機能したことが分かる。

出土遺物は磁器染付中碗・皿、陶器碗・小皿・擂鉢・土瓶、土師質土器杯・焜炉、硯、鉄釘である。

図示したものは454・455・457である。

454は灰釉端反形小碗。畳付外側に面取りを施す。高台無釉。灰釉は灰白色を帯びる半透明の釉で2㎜前後の貫入が入る。関西系で19世紀の製品である。455は肥前産の刷毛目皿で、内面に白化粧土刷毛目を施す。口縁部は溝縁状である。断面には漆継痕が残る。18世紀前半の製品である。

457は土製の人形で、鳥。手捏ね成形で中実。外面にナデ調整を施す。胎土はにぶい黄橙色を呈する。

この他、SK15では土瓶、焙烙、関西系の灰釉灯明受皿など18世紀末から19世紀の遺物が出土している。SK15は19世紀に比定される。

SK16 (Fig.51・53)

調査区の西部、B－3グリッドに位置する土坑である。平面形は楕円形を呈し、検出規模は長軸1.20m、短軸1.10m、深さ10cmを測る。埋土は1層：黒褐色シルト、2層：黒褐色粘質シルトである。西側に近接するSK15とは出土遺物の接合関係があり、同時期に機能したことが分かる。

出土遺物は磁器染付中碗・瓶、白磁紅皿、陶器小碗・土瓶・灯明皿、土師質土器小皿・焙烙、瓦であり、肥前産の広東形碗、関西系の灰釉灯明受皿、灰釉端反形小碗、灰釉土瓶、など18世紀後半～19世紀の遺物が多く含まれる。

図示したものは458～463である。

458～461は肥前産磁器。458は染付広東形碗で、草花に仙芝文を組み合わすタイプの碗とみられる。肥前産で1780～1810年代のもの。459は色絵小皿。口縁部は折縁形で、体部は薄手である。口錆。口縁部内面に赤と黄の上絵付による文様帯を巡らしているが、釉は殆どが剥離している。肥前有田の製品で1640～1660年代のもの。460は白磁紅皿。461は鵜首逆薊形の中瓶で草花文を描く。肥前波佐見産で18世紀後半のものである。

462は陶器で、灰釉壷物。口縁端部無釉。灰釉は灰色を帯び1㎜前後の貫入が入る。外面に鉄絵を施す。463は土師質土器の火入れか。胎土は灰白色の土に橙色土を練り込んでいる。ロクロ成形の後、外面にナデ、ミガキを施す。

SK15との同時期性や遺物内容からみてSK16は19世紀に比定される。

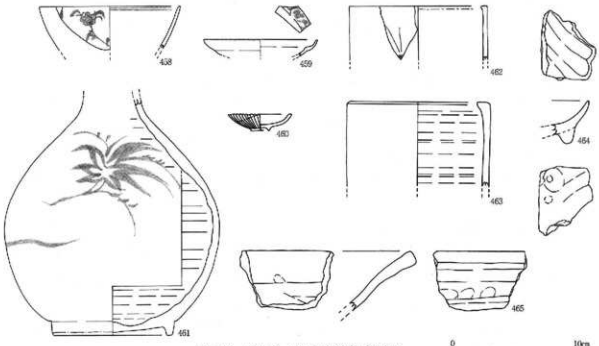


Fig.53　SK16・17出土遺物実測図
SK16（458～463），SK17（464・465）

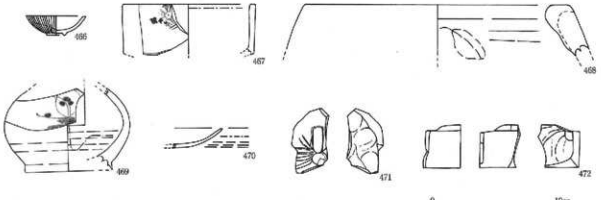


Fig.54　SK18出土遺物実測図

SK17 (Fig.51・53)

調査区の西部、C－3グリッドに位置する。平面形は楕円形を呈し、検出規模は長軸1.66m、短軸1.06m、深さ16cmを測る。断面形態は皿状で、壁は緩やかに立ち上がる。埋土は灰黄褐色粘質シルトで、下層には炭化物が多く含まれる。切り合い関係では土坑SK15を切る。

出土遺物は磁器染付中碗、白磁小杯、磁器色絵小碗、陶器中碗・小皿・鍋、白土器小皿、土師質土器焙烙、瓦、鉄製の包丁である。

図示したものは464・465である。

464は型作りによる変形形の灰釉皿。脚は貼付する。灰釉はオリーブ灰色を帯びる光沢の強い透明の釉で2～3mm大の貫入が入る。465は讃岐岡本系の焙烙。胎土はにぶい橙色で、胎土中に石英、長石、雲母、灰黒色系鉱物などの粗砂を含んでいる。口縁部外面にユビオサエ後ヨコナデ、体部内外面にヨコナデ調整を施す。粘土帯接合部には連続したユビオサエ痕を認める。外面に煤が付着している。

図示したものの他、肥前産の染付暦手文広東形碗、染付唐草文瓶、尾戸窯産の白土器小皿、鉄釉鍋等が出土している。遺物内容及びSK15との切り合い関係からみて、SK17は19世紀に比定される。

SK18 (Fig.54)

調査区の西部に位置する大型の土坑である。平面形は隅丸方形を呈し、検出規模は長軸4.5m、短軸3.8m、深さ30cmを測る。断面形態は皿状で、埋土は灰黄褐色粘質シルトである。切り合い関係では、溝SD5を切っている。

出土遺物は染付中碗・小碗・小皿・瓶、青磁染付小皿、白磁小碗・紅皿、陶器蓋物・灯明皿、土師質土器小皿・焜炉・人形であるが、遺物量は全体に少ない。

図示したものは466～472である。

466は肥前産の白磁紅皿。469は肥前産の染付小瓶で外面に草花文を描く。467は灰釉の半筒形蓋物で、外面に呉須と鉄錆で草花文を描く。花は呉須、葉と茎は鉄錆で描き分けている。内面施釉。口縁端部無釉。灰釉は淡黄色を帯びる半透明の釉で細かな貫入が入る。470は陶器の灯明受皿。外面回転ケズリ。内面と外面上半に鉄錆を施す。口縁部に灯芯油痕を認める。

468は土師質土器の焜炉。粘土紐積み上げ成形。外面にヨコナデ、ミガキ、内面にヨコナデ。内部突起は接合部で剥離している。471は土人形で、天神。型押し成形貼り合わせによるもので、中空

である。胎土はにぶい橙色を呈する。472は471の台座の部分とみられる。

SK19 (Fig.55・56)

調査区の西部、C－5グリッドに位置する土坑である。平面形は楕円形を呈し、検出規模は長軸2.8m、短軸2.2m、深さ10～20cmを測る。埋土は灰黄褐色シルトで、埋土中に円礫と瓦片を多く含んでいる。切り合い関係では溝SD1を切っている。

出土遺物は染付中碗・小碗・小皿・碗蓋・蓋物・瓶・植木鉢、白磁中皿・小杯、青磁小皿、磁器色絵小碗、色絵染付小碗、陶器中碗・小皿・中皿・蓋・瓶・甕・壺、鉄釘、瓦である。

図示したものは473～498である。

473～487は磁器。

473～476・478は碗である。473は能茶山窯の端反形中碗で、外面に宝文と網目文、帯線、口縁部内面に多重圏線、見込みには宝文を描く。高台内に角枠内「茶」の銘をもつ。474は能茶山窯の広東形碗で、外面に山水文、口縁部内面に二重圏線、見込みに水と岩を描く。高台内には「サ」銘をもつ。内底に目痕をもつ。475は肥前系の広東形碗で、見込みに宝珠状の文様を描く。478は肥前系の丸形小碗。外面に格子文と蕉弁文、見込みに火焔宝珠文を描く。476は関西系の端反形小碗。外面に草文、口縁部内面に連続唐草文。見込みには「□□□製」の銘をもつ。蛇の目高台で、畳付の外側に面取りを施す。胎土は白色で、断面は滑らかで光沢をもつ。呉須は青色に発色する。

482は染付小杯。482は肥前系の端反形小杯で、薄手の作り。見込みに竹文を描く。

477は能茶山窯の腰張形蓋物で、外面に多重圏線を巡らせ、四方に草花文を配する。高台内に角枠内「茶」銘をもつ。内底に目痕3足。二次被熱により釉は変質する。

479・480は染付碗蓋。479は広東形碗の蓋で肥前系。外面に竹と若松文、口縁部内面に二重圏線、見込みに寿字状の文様を描く。摘み内に銘をもつ。480は肥前系の中碗蓋で、外面に微塵唐草、口縁部内面に四方襷、見込みに松竹梅円形文を描く。摘み内には「□□年製」の銘をもつ。

481は染付蓋物の蓋。外面に梅文を描き、摘みを貼付する。483は色絵染付の蓋物である。呉須と赤、その他の上絵付で窓と草花文及び唐草文を描くもので、唐草は白抜きで表し、地を赤で埋めている。肥前産で18世紀末～19世紀前半の製品である。

484は青磁の小皿。口縁部輪花形で、高台は蛇の目高台となる。内面には陽刻の花卉文が施される。肥前有田の製品で1660～1670年代。485は白磁の中皿。口縁部折縁形。透明釉は僅かに青色を帯びている。肥前産で1630～1640年代。

486は染付の花生けである。外面に草花文。双耳を貼付する。肥前産で18世紀後半～19世紀初頭。

487は染付の植木鉢で、外面に山水文を描く。底部中央に1.5cmの円孔を穿ち、高台の双方にアーチ状の抉りを入れる。畳付の両側に面取りを施している。

488～498は陶器。

488・489は灰釉中碗。488は肥前産の灰釉丸形碗で、高台施釉。489は尾戸窯産の可能性をもつ灰釉碗で、内面にロクロ目。外面には工具による荒いナデ痕が残る。底部無釉で、灰オリーブ色を帯びる透明の釉を施釉する。

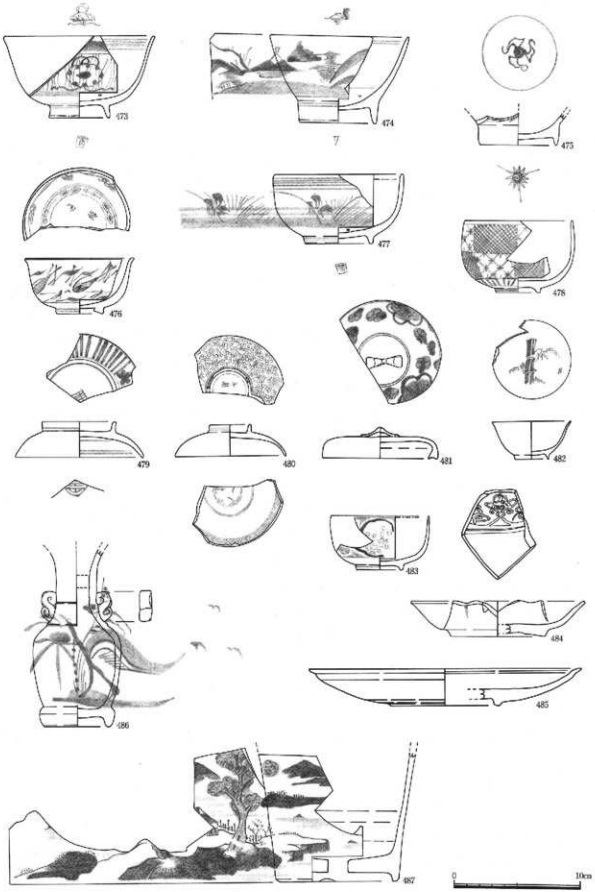


Fig.55　SK19出土遺物実測図 (1)

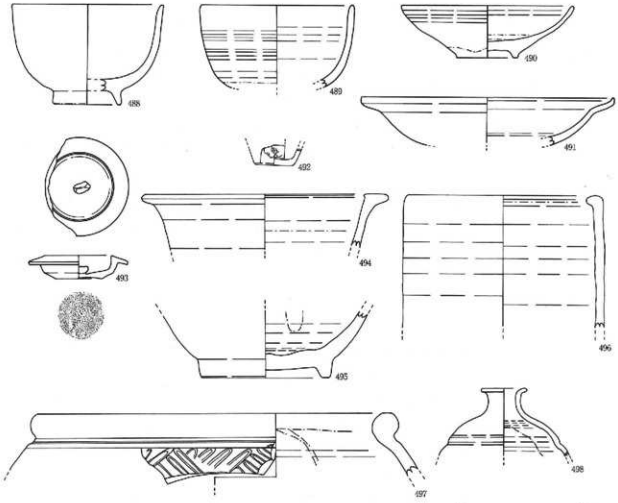


Fig.56　SK19出土遺物実測図 (2)

490・491は灰釉皿。490は見込み蛇の目釉剥ぎの小皿。内外面ロクロ目。底部無釉。灰釉はにぶい褐色に発色している。491は口縁部溝縁形の灰釉中皿。灰釉は浅黄色を帯びる半透明の釉である。

492は灰釉の桶形小杯。外面に呉須で梅文を描く。

493は鉄釉の土瓶蓋。摘みを貼付する。外底回転糸切り。外面無釉。鉄釉は赤黒色に発色する。

494は植木鉢か。内外面緩やかなロクロ目。内面下位無釉。灰白色を帯びる半透明の釉で1㎜前後の貫入が入る。

495は灰釉壺。高台施釉。灰釉は灰黄色を帯びる半透明の釉で1㎜前後の貫入が入る。胎土は灰白色を呈する。496は火入れ又は火鉢。内面無釉。浅黄色を帯びる半透明の釉を施釉する。497は甕。口縁部は玉縁状で、外面上位に丸彫りによる櫛歯文を施す。灰釉はオリーブ黄色を帯びる半透明の釉で、厚く掛かる部分は白色に発色している。胎土は灰白色を呈する。498は灰釉の小瓶。内面ロクロ目顕著。灰オリーブ色を帯びる半透明の釉を施釉する。

1836年～幕末にかけて生産された在銘の能茶山窯磁器（473・474・477）等を含んでいることから、SK19は19世紀中葉に比定される。